

平成 30 年度卒業論文

テレビドラマにおける恋愛模様の描かれ方と社会背景に関する考察

北海道教育大学教育学部旭川校

教員養成課程 社会科教育専攻 社会学ゼミ

学生番号 5336

秋野 有咲

## 目次

はじめに	1
第1章 恋愛・男女の交際・結婚について	2
1-1 恋愛とは	2
1-2 日本における恋愛の流れ	2
1-3 交際相手の有無	4
1-4 交際相手を持たない若者の増加とその理由	4
1-5 恋愛と結婚	5
1-6 婚姻率・未婚率の変化	7
1-7 出会いの変化	9
1-8 女性の社会進出と恋愛の関係	10
1-9 「恋愛・性・結婚」の一体化と分化	11
1-10 理想の相手像・相手に求めるものの変化	11
1-11 男女の役割の変化	13
1-12 恋愛と収入	14
1-13 小括	15
第2章 テレビ視聴の変遷	17
2-1 テレビの歴史	17
2-2 テレビの特徴	18
2-3 テレビの特徴の弱まり	18
2-4 テレビ視聴の在り方と変化	19
2-5 インターネットテレビによるテレビ番組の視聴	22
2-6 人気のテレビ番組	24
2-7 テレビドラマの歴史	26
2-8 テレビドラマの年代ごとの変化	27
2-9 小括	28

第 3 章 年代ごと恋愛ドラマの描かれ方	29
3-1 恋愛ドラマの人気	29
3-2 1980 年代以前の恋愛ドラマ	29
3-2-1 カラーテレビの登場から 1980 年代に入るまで	30
3-3 1980 年代前半の恋愛ドラマ	30
3-3-1 「新人類世代」	31
3-3-2 1980 年代前半に人気となった恋愛ドラマ	32
3-3-2-1 「ふぞろいの林檎たち」(1983 年)	32
3-3-2-2 「金曜日の妻たちへ」(1983 年)	33
3-3-3 ドラマ人気の背景	33
3-4 1980 年代後半～1990 年代前半の恋愛ドラマ	34
3-4-1 「バブル時代」	34
3-4-2 1980 年代後半～1990 年代前半に人気となった恋愛ドラマ	35
3-4-2-1 「男女 7 人夏物語」(1986 年)	35
3-4-2-2 「東京ラブストーリー」(1991 年)	35
3-4-2-3 「101 回目のプロポーズ」(1991 年)	36
3-4-3 ドラマ人気の背景	36
3-5 1990 年代後半～2000 年代の恋愛ドラマ	37
3-5-1 「団塊ジュニア世代」	37
3-5-2 1990 年代後半～2000 年代前半に人気となった恋愛ドラマ	38
3-5-2-1 「ロングバケーション」(1996 年)	38
3-5-2-2 「失樂園」(1997 年)	38
3-5-2-3 「神様、もう少しだけ」(1998 年)	39
3-5-2-4 「ビューティフルライフ」(2000 年)	39
3-5-3 ドラマ人気の背景	39
3-6 「希望格差社会」	40
3-7 2000 年代後半～現在の恋愛ドラマ	41
3-7-1 恋愛リアリティ番組の増加	42
3-7-1-1 「あいのり」の登場から現在まで	42
3-8 小括	43
第 4 章 まとめ	44

おわりに・・

46

謝辞・・

46

参考文献・・

46

参照 HP・・47

## はじめに

「恋愛」というものはいつの時代にもあったものかつ人生の上で必要不可欠なものであると私は考えている。というのも恋人を作り、結婚し、子孫を残すことはその個人にとってそして、その個人の将来にとって必要なこと、重要な位置づけにあることだからである。しかし、「恋愛」のそのような重要性に反して、「若者の恋愛離れ」がメディアで取り上げられるようになった。今の若者は恋愛に対して非常に消極的で、その象徴として「草食男子」という言葉が2006年に誕生し、社会に広まった。名付け親である深澤真紀氏は「草食男子」を「恋愛に『縁がない』わけではないのに『積極的』ではない、『肉』欲に淡々とした35歳以下の男性」と定義づけし、恋愛ができないわけではないのにしない人々が誕生したことを示した。

恋愛ができないわけではないのにしない若者がなぜ増加しているのかということに私は関心を抱いた。また、そのことの要因を突き止めていきたいと考えた。加えて、年代ごとにどのような恋愛観があったのかを今と比較することでその手掛かりを探していきたい。そのため、本論文においてはそのような傾向は事実であるのか、恋愛離れにはどのような背景があるのか、年代ごと恋愛への見方はどのように変化したのかということを実際のデータや恋愛模様を描いた作品から読み取っていきたいと考える。なお、恋愛模様を描いた作品といっても、小説・漫画・映画・テレビ番組などがあると思うが、今回はテレビドラマに焦点を当てる。私自身テレビに影響を受けてきたということや、テレビは人々にとって身近で、メディアとしての効力が大きいと予想されること、そして、テレビドラマはその年代ごとの流行や社会背景を映し出すのではないかと考えたためテレビドラマから恋愛の変容や社会の変化についてみていくこととした。

第1章では、恋愛の今と昔といった大まかな形で、恋愛・交際・結婚に関わるデータを比較しながら今と昔で恋愛の在り方にどのように変化したのか、また、どのような要因によって恋愛の在り方が変化したのかを文献を引用しながら述べていく。

第2章では、テレビという媒体の在り方や今と昔の視聴スタイルの変化をみていき、現在の若者のテレビやテレビドラマの視聴の形について考えていく。

第3章では、第1章と第2章を踏まえ上で、いくつかの年代に分けてその年代の当時の社会や若者像を見ていく。そのうえで若者を象徴とする代表的な恋愛ドラマについていくつか取り上げその人気の背景を考察する。また、そこから現在の若者像や恋愛に対する見方を見ていく。

第4章は、以上の1、2、3章を総じて、若者の恋愛離れに関する考察と恋愛の変容についてまとめていく。

## 第1章 恋愛・男女の交際・結婚について

本章においては、恋愛の今と昔というような大きな枠の中で恋愛傾向がどのように変化したかということを中心に恋愛にまつわるデータをもとに比較していき、今の恋愛がどのような現状にあるかを見ていく。

### 1-1 恋愛とは

恋愛とは、辞書によると“[名] (スル) 特定の人に特別の愛情を感じて恋慕うこと。また、互いにそのような感情をもつこと。”(デジタル大辞泉より)とある。一方、恋の意味は“特定の人に強くひかれること。また、切ないまでに深く思いを寄せること。恋愛。「恋に落ちる」「恋に破れる」とあり、恋愛とほとんど同じ意味ではあるが異なる点として、一方的な感情でなく互いに惹かれるということが挙げられる。

以上より恋愛という観念は広く捉え難いため、本章および本論文においては、異性間の恋愛、また、一方的でなく相互に惹かれあうことやその先にある異性間の交際及び結婚に焦点を当てる。

### 1-2 日本における恋愛の流れ

日本で恋愛について映し出しているものみることができるのはまず、「万葉集」がある。万葉集においていくつか恋にまつわる和歌が詠まれている。その後「源氏物語」が登場し、光源氏の恋について描かれている。しかし、このあたりの時代には「恋愛」という言葉が存在しておらず、色や情交といった言葉が使われていた。また、そもそも「恋愛」という観念がなかったといわれている。

日本における恋愛という言葉、及び観念の始まりは、「12世紀の西欧で発明され、日本に

は明治期に輸入された」という説がみられる。また、このことを定説としている文章もみられる。そのため、以下では明治期以降の日本における恋愛の文化についてみていく。

明治期に西洋近代思想の洗礼を受けた日本の思想家たちは、西洋から入ってきた『ラブ (LOVE)』という観念を、それまで日本の中にあった情や色とは全く異なるものと受け取った。西洋の『ラブ (LOVE)』には人間の欲を超えた精神性や男女の相愛というものが含まれており、当時の日本の遊郭文化や売春文化に馴染んだ多くの男性には思いもよらない高尚な文化がその“ラブ”にはあったためである。西洋から輸入された“ラブ”という観念は厳格な性道徳を基礎とした男女関係に関する思想であったため、ひととき日本の性道徳が汚らわしく見えたのではないかと考えられる。この“ラブ”という観念は、当時の日本の思想家にとって大きな衝撃であったようで、この新しい思想を表現する言葉が必要になった。そこで選ばれたのが『恋愛』である。明治20年に日本に入ってきたとされるこの恋愛という言葉が日本で定着するのには10年以上がかかったとされている。

その後、この恋愛という言葉や観念が定着した大正期には純愛こそ正義、つまり強い貞操観念が日本の中で強くなる。それまでの日本の遊郭文化や売春文化を汚らわしいものと捉え、恋愛という観念に大きな影響を受けた結果だと考えられている。この頃から日本は結婚するまで純潔でなければならないという考えが強くなった。この時代、恋愛（及び性愛）と結婚は別物であるという意識が非常に強かったと言われている。戦後までそういった考え方は強く、一度薄れた時期もあるが、1940年代に文部省が「純潔教育」を行い、純愛的な考え方を再び定着させた。

しかし、1970年代に入ると恋愛・結婚に関する理想を歌った歌が増加する。この時期はお見合いによる結婚が多かった日本で恋愛結婚が増加した時期であり、小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」やチェリッシュの「てんとう虫のサンバ」といった、理想の恋愛結婚を歌った曲が流行し、人々はこれらの曲を聴き、共感していた。自由恋愛の考え方が広まるようになっていく。

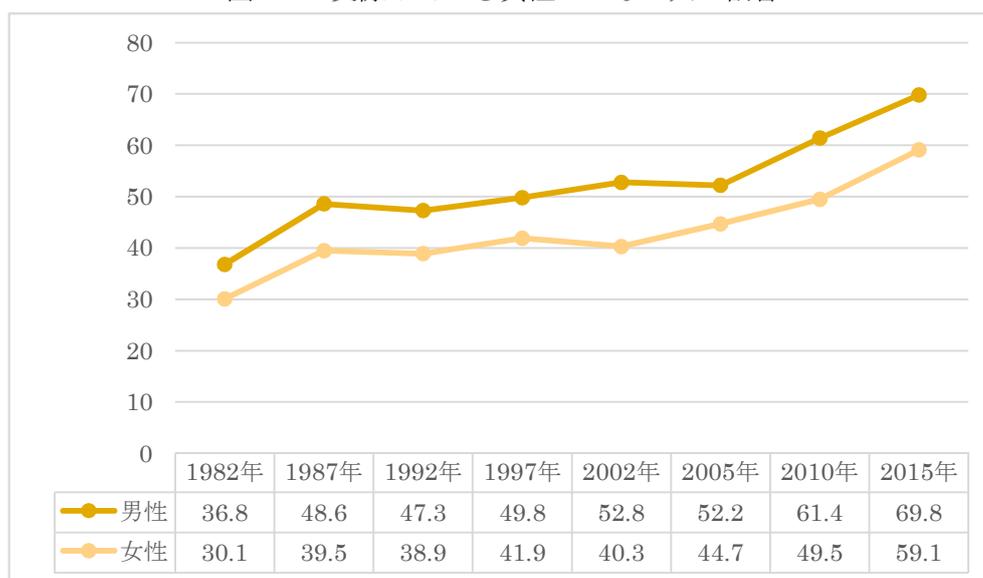
1980年代には恋愛をテーマにしたテレビドラマが徐々に放送されるようになり、より広く恋愛の在り方・恋愛の理想像が広まっていく。加えて、その後1990年代以降は恋愛にかかわるテレビドラマの放送が増え、様々なブームを巻き起こした。この恋愛にかかわるテレビドラマについては3章で詳しく述べる。1980年代後半から1990年代にかけてのいわゆるバブルの時期には、派手な恋愛が目立つようになる。1990年の流行語には、「アッシー・メッシー・ミツグ君」という言葉が誕生し、車で女性を送迎し、ご飯を奢り、プレゼントを買いしてくれる男性を指した。見た目や装飾品、男女間のお金の使い道が派手だったのである。また、そういった関係が一種のステータスになっていた時期でもあった。

その後、2000年代に入ると、「草食男子」という恋愛に関して消極的な姿勢の男性を指す言葉が誕生し、恋愛に関して消極的な若者が増加したことが表された。また、一方で「肉食系男子」とは反対に恋愛に対して積極的な男性を指す「肉食男子」という言葉も誕生した。

恋愛という文化が入ってきてから日本の「恋愛」に対する見方や考え方は多くの文学作品・映画やテレビドラマが作られ、流行語ができたように変化してきた。では、恋愛の在り方や考え方は実際どのように変化しているのだろうか。また、どのようなことが恋愛の在り方に影響を与えているのだろうか。以下では、交際・結婚に関するデータからそれらについて考えていく。

### 1-3 交際相手の有無

図 1-1 交際している異性がない人の割合



出生動向基本調査より筆者作成

2015年に実施された第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）の結果より、現在の日本の未婚者の交際相手の有無を示したものである。この調査においては、未婚の18歳から34歳の男女を対象としている。ここでは1982年から2015年までを比較していく。

回答を見てみると「交際している異性はいない」という部分で男女ともに割合は上昇傾向にある。この調査が始められた1982年では男性が36.8%、女性が30.1%であったのに対し、2015年では男性が69.8%で女性が59.1%と非常に大きな変化を遂げた。ここから2000年代を生きる人々のいわゆる「恋愛離れ」の傾向が映し出されており、また、その傾向が事実であることを明確に示している。このことに加えて、交際相手を持たず、交際も望んでいない男女は約3割にもものぼる。では、なぜこれほどまでに交際相手をもたない人々が増えているのだろうか。

### 1-4 交際相手を持たない若者の増加とその理由

交際相手を持たない男女が増加している理由として、まず、恋愛よりも楽しいことがあるためということが考えられる。かつて（特に1980年代後半から1990年代の初頭のバブ

ル期)は、「恋愛は楽しいもの、必要なもの」という考えが広まっていたが、現在は違うようである。恋愛以上に楽しいものを人々の生活にあふれるようになった。ゲームをしたり、スマートフォンで SNS を見たり、アプリで遊んだり、インターネット上でショッピングまでができるようになったりと、外に出ずとも、人と会わずとも“楽しい”と感じられるものを人々は手にしたのである。加えて、空想上の恋愛・バーチャルな恋愛にはまる人々が増加したことも挙げられる。恋愛ゲームであれば「ときめきメモリアル」や「ラブプラス」が人気となったり、「会いに行けるアイドル」が誕生したりと空想上で恋愛感情や欲求を満たすものが登場した。そういった今人々が楽しいと感じられることは相手がいなくとも楽しい、一人でも楽しいと感じられるものが多く、恋愛とは異なり、人から干渉されることがないということも大きな魅力といえよう。

楽しいことが増えたため交際相手を持たない男女が増加したと述べたが、その楽しいことに SNS を挙げた。この SNS の登場も「恋愛離れ」に大きく影響を与えている。理由は利用していて楽しいからということも言えるが、相手を監視するツールとして使われるようになったからという面もかなり大きい。相手が今何をしていた、どこにいて、誰といてなどということも SNS 上では常に監視できる。そのため、お互いに強い束縛を感じ、恋愛は面倒なものという印象をより強くさせている。「80年代恋愛至上主義の時代に入ると、恋愛が遊戯化して『自由恋愛』の気運が高まった。」とした上で、「現 20代男女にとって、自由恋愛は生まれたときから当たり前のこと。その解放感よりは、SNS による束縛実感の方が何倍も大きい」(牛窪, 2015:56-57)との指摘があり、恋愛に対する若者の窮屈さがうかがえる。

また、交際相手を持たない男女の増加に対して、牛窪(2015)は以下のように指摘している。「ふだんは平等、なのにいざ恋愛、交際となると、突如として『男が支払うべき』『告白すべき』など、男らしさが要求される」(牛窪, 2015:76-77)ということである。恋愛が最も盛んな現 20代、30代の男女は家庭科の男女共学が当たり前であり、男女雇用機会均等法の制定など男女平等が当たり前のことになっていたため、学校・職場において男女平等の意識が高い世代といえる。一般的に現在でも恋愛において交際や結婚に至るまでの告白やプロポーズを行うような重要な役目を担うのは男性というイメージが強く、そのことに対して不満があることから恋愛・交際に至らないことも考えられる。

以上のようなことが大きく交際相手を持たない若者が増加している理由であると考えられる。以下ではさらに恋愛から離れていく理由について考えていきたい。

## 1-5 恋愛と結婚

まず考えたいのは、恋愛と結婚は結びつくかということである。第 11 回の出産動向基本調査(1997年)において「恋愛と結婚は別である」<sup>1</sup>という質問項目が存在した。答したのは当時 18~34 歳の未婚の男女であり、当時の未婚男女はその質問に対して約 6 割がその考

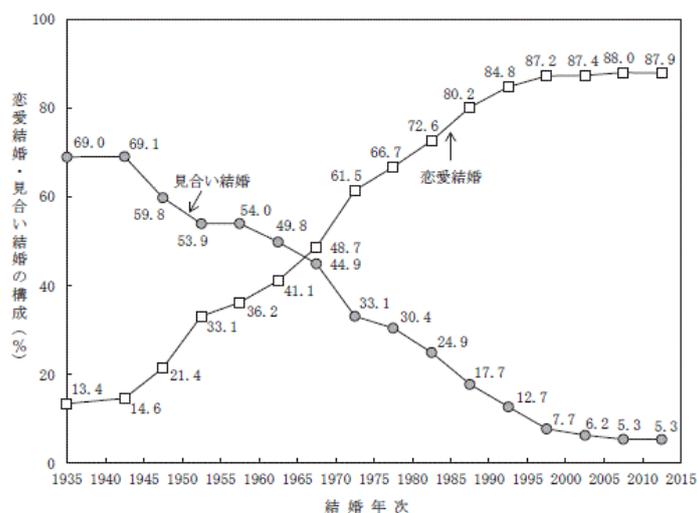
---

<sup>1</sup> 第 11 回出生動向基本調査(1997年)以降の同調査ではこの質問項目は削除されている。

え方に賛成と回答している。この回答に関して「いちばん好きな相手と大恋愛の末に結婚なんてうまくいくわけがない、あるいは、結婚相手としての望ましさと恋愛対象としての魅力の両方を兼ね備えた異性がいるわけがない、といった心理が読み込むことができる。」(加藤, 2004:16-17) という解釈がなされている。恋愛と結婚が全くの別ものとして分離しているわけではなく、平凡な結婚に結びつくような現実主義的な恋愛とそのような平凡な恋愛とはまた異なったロマンチックな恋愛とが人々の意識の中で区別されていることを表しているのである。そのため、恋愛と結婚は全くの別もの、かけ離れたものではないといえるだろう。

現代においての“結婚”のほとんどは“見合い結婚”ではなく、“恋愛結婚”である。なお、この場合の恋愛結婚は相手との出会いに関して見合い・結婚相談所といった場での出会いを除くものと出生動向基本調査において定義付けられている。図 1-2 は、1935 年から 2015 年の間、初婚の夫婦が結婚の要因が見合いか恋愛かについて回答当時 18 歳～34 歳の男女が回答したものである。1935 年は圧倒的に見合い結婚の割合が高いが見合い結婚は急激に減

図 1-2 見合い結婚と恋愛結婚の構成

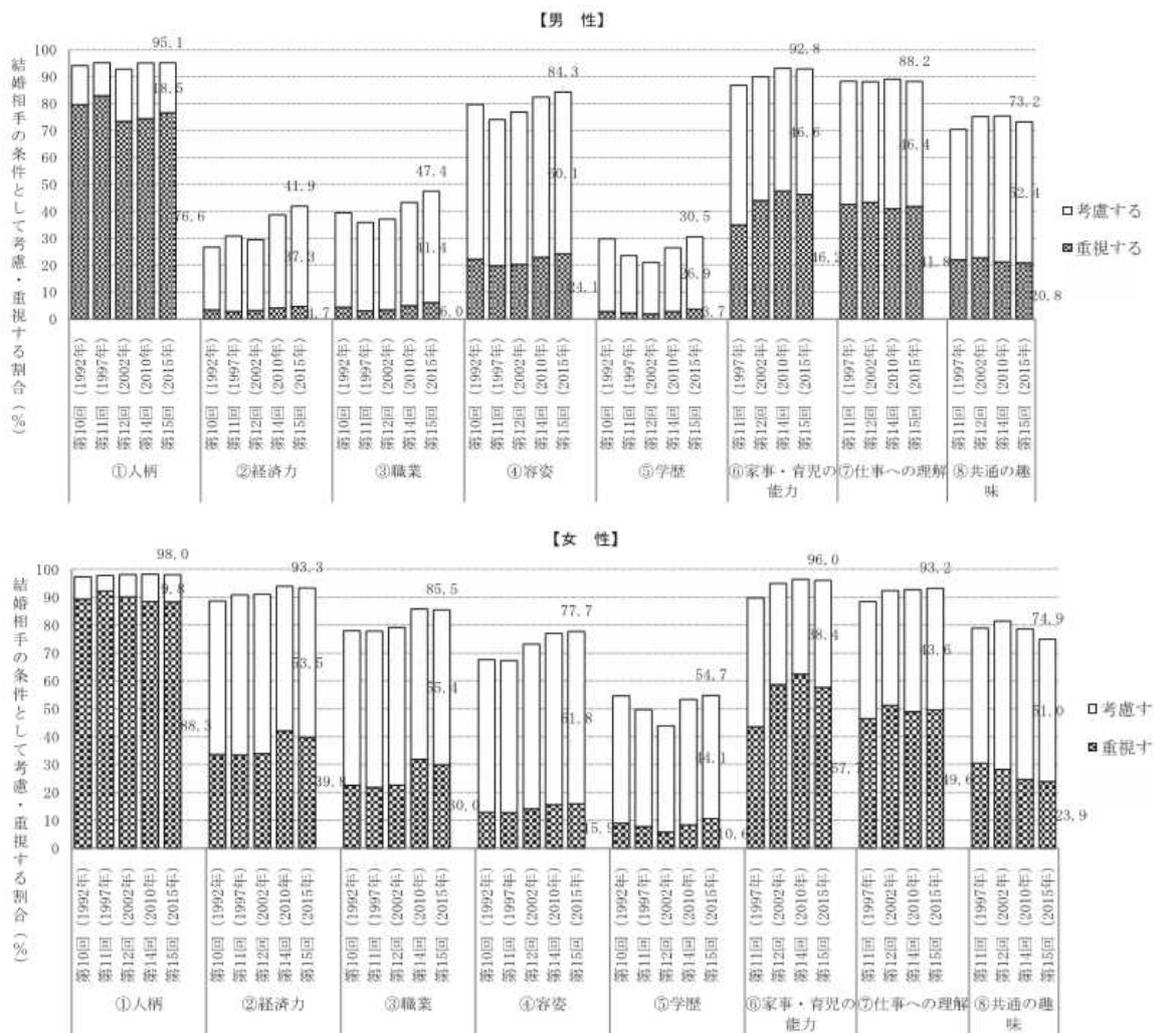


出所：国立社会保障・人口問題研究所

少し、1965 年と 1970 年の間で結婚の要因が“見合い”でなく“恋愛”でに変化している。見合い結婚が減少した要因として、近所付き合いの希薄化が大きいとされている。恋愛結婚の割合はその後上昇し、2000 年に入ってからには一定の割合の人々が恋愛をきっかけとして結婚まで至っている。見合いと恋愛の大きな違いは、結婚相手を自分で決められるか他者によって決められるかという部分である。恋愛は自分で選び決定し、判断を下す。そのため、現代に生きる人々のほとんどが結婚における出会いを自らで選択し、自らで決断しているといえる。また、ここから見えるのは恋愛＝結婚というつながりがより強くなっていることである。「今付き合っている人とこの先も共にする」と考えた時に交際するということがある種のプレッシャーのよしのしかかり、先に述べたような交際している異性はいないという若者の増加につながっているのかもしれない。

また、恋愛＝結婚というつながりが強くなったことで、相手がただかっこよかったり面

図 1-3 結婚相手に求める条件



出所：国立社会保障・人口問題研究所

白かったりではいけなくなってしまった。住む世界があまりにもかけ離れては困るし、経済力や将来設計も気にしなければならなくなってしまったのである。もちろんかっこいい、面白いに越したことはないが、それ以外の要素（例えば、収入や職業）のほうが重要視される。このことから相手に求める要素は複雑化してきていることが予想され、相手の見極めが難しくなってしまっていることが見えてくるのである。

### 1-6 婚姻率・未婚率の変化

実際の結婚しているのはどれほどの割合なのか。以下は婚姻率と婚姻件数を表したものである。見合い結婚が半数以上を占めており、恋愛と結婚とのつながりがまだ弱かった1947年に婚姻率が最も高くなっている。また、婚姻件数では、1972年が最も多くなっている。

これは、単純に人口の多い団塊の世代の人々が結婚に適した年齢になり、結婚まで至ったためであると考えられる。婚姻率・婚姻件数ともにやはり年々減少傾向にあることがわかる。

図 1-4 婚姻率・婚姻件数の変化

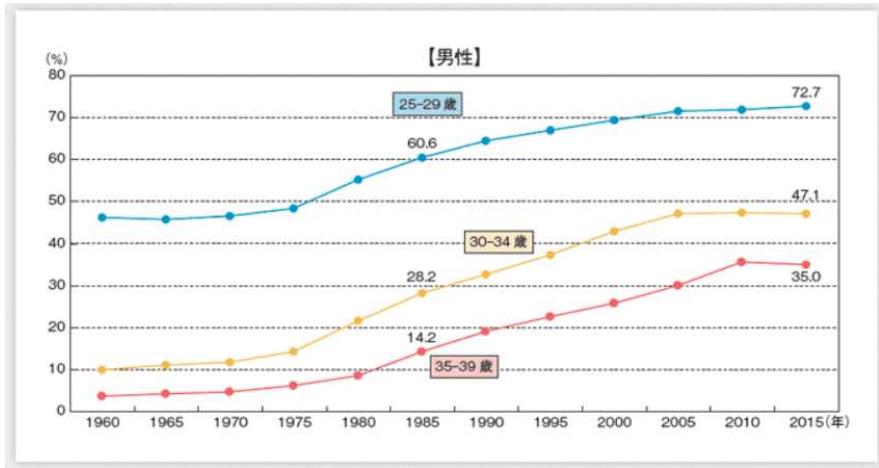


出所：内閣府 HP

いずれも 2000 年以降にその傾向が見え始めている。かつては結婚して当たり前であった 20 代 30 代の層が結婚から遠ざかっていることが予想される。

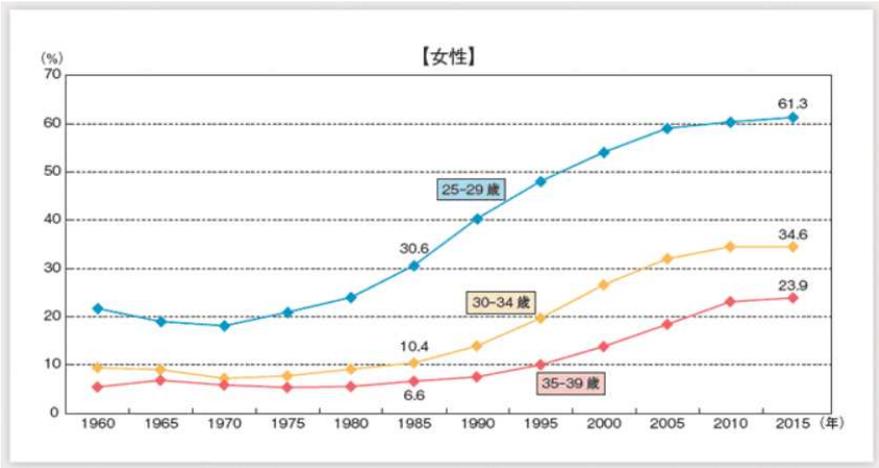
未婚率の割合に注目してみる。未婚率は婚姻率とは異なり、どの年齢でも上昇がはっきりとみられる。特に 1975 年以降に緩やかではあるものの上昇しており、この 1975 年は見合い結婚から恋愛結婚へと転換したタイミングと重なる。

図 1-5 男性の未婚率



出所：内閣府 HP

図 1-6 女性の未婚率



出所：内閣府 HP

未婚率の著しい上昇は、恋愛と結婚のつながりが強くなった今、交際から結婚に至るまでの決断をなかなかできない人が増加していることを表しているともいえよう。恋愛やその先の交際について自己決定ができるようになったことが裏目に出て、自己決定できない人々を苦しめているのかもしれない。また、顕著なのは女性の未婚率である。特に 25 歳～29 歳の女性における未婚率の上昇は著しく、1985 年を区切りとして一気に上昇している。予想されることは、働く女性の増加である。1985 年男女雇用機会均等法が制定され、ある程度女性が働く環境や状況は変化した。恋愛に充てる時間が減り、結婚に至ることが難しくなっていることが予想される。

1-7 出会いの変化

図 1-7 結婚相手との出会いの構成

調査 (調査年次)	総数	恋愛結婚							見合い 結婚	その他 ・不詳
		職場や 仕事で	友人・兄弟 姉妹を通 じて	学校で	街なかや 旅先で	テレビ・雑誌 若いこと で	Yahoo!で	幼なじみ ・隣人		
第8回調査 (1982年)	100.0%	25.3%	20.5	6.1	8.2	5.8	-	2.2	29.4%	2.5%
第9回調査 (1987年)	100.0	31.5	22.4	7.0	6.3	5.3	-	1.5	23.3	2.7
第10回調査 (1992年)	100.0	35.0	22.3	7.7	6.2	5.5	4.2	1.8	15.2	2.0
第11回調査 (1997年)	100.0	33.5	27.0	10.4	5.2	4.8	4.7	1.5	9.7	3.1
第12回調査 (2002年)	100.0	32.9	29.2	9.3	5.4	5.1	4.8	1.1	6.9	5.2
第13回調査 (2005年)	100.0	29.9	30.9	11.1	4.5	5.2	4.3	1.0	6.4	6.8
第14回調査 (2010年)	100.0	29.3	29.7	11.9	5.1	5.5	4.2	2.4	5.2	6.8

出所：国立社会保障・人口問題研究所

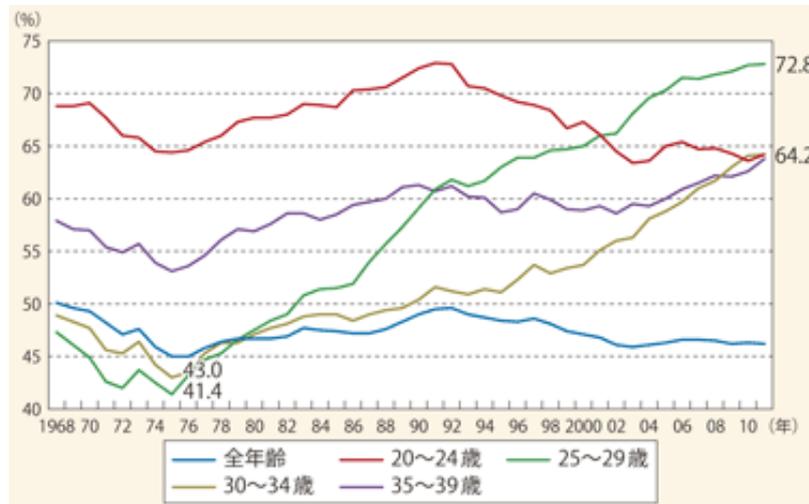
出会い・恋愛・結婚という流れの中で人々はどのように出会い、恋愛に発展し、結婚までに至るのか。図 1-7 は初婚の夫婦に出会いのきっかけを調査した結果である。

調査開始時の 1982 年は「職場や仕事で」という項目が 25.3%と最も高くなっている。しかし、徐々に「友人・兄弟姉妹を通じて」という項目が上昇し、2010 年の調査では「職場や仕事で」という項目を上回る結果となっているのである。女性が社会に出て、仕事をやる場面が増えているということをよく耳にするようになった現代であるが、その反面、職場恋愛及び職場結婚というものが減少しているのである。職場に女性が増えたのにもかかわらずなぜだろうか。そこにはただ男女が出会える場面が増えただけでは意味がないということを実に表している結果が表れているといえる。では、社会に出て働く女性が増えたことでどのような意識や考え方が生まれているのだろうか。以下ではそのことについても見ていく。

#### 1-8 女性の社会進出と恋愛の関係

社会に出て働く女性が増加した現状があると先に述べたが、実際どれほどの女性が社会に出て働いているのだろうか。女性の就業率についてみていく。

表 1-1 女性の就業率の変化



出所：国土交通省

25歳～29歳、30～34歳の女性の就業率の上昇が目を見守る。1975年あたりを区切りとしてともに上昇していることがわかる。このあたりは未婚率の上昇が始まった時期と同様に見合い結婚から恋愛結婚に転換している最中といえ、これより以前であれば親や親族によってお見合いが取り決められ、結婚が必然的に決まり、家庭に入り専業主婦として一生を終えるという流れが一般的であった。しかし、恋愛結婚への意識が日本の中で強まり、恋愛や結婚が自己で選択できるようになったため仕事を行う女性が増えたのだと考えられる。また、1985年に再び25～29歳の女性の就業率が上昇している。この年は男女雇用機会均等法が制定された年であり、より女性も働くという意識が生まれた年でもある。

この女性の就業率の上昇が職場恋愛の減少の要因であると北村と阿部（2007）は指摘している。「かつては企業に就職すれば会社の中で結婚相手を見つけることができ、サラリーマンと専業主婦の組み合わせからなる典型的な家族像を遂行することができた。若い男女は『恋愛結婚』の名のもとに職場からも家族からも社会からも承認されるかたちで、恋愛し、結婚し、家族を持つことができた」と述べたうえで、「女性の就業年数が長期化し一方で男女ともに非正規雇用化の波にさらされているとき、同じ会社のなかで、キャリアを捨てて家庭に入ってくれる女性やブレッド・ウィナー（稼ぎ手）候補の男性と出会うことが難しくなる」（阿部・北村，2007:19）と指摘しているのである。確かに会社・職場で男女が出会う確率は上がったかもしれないが、恋愛結婚が基本となっている今、交際に至る以前に将来の在り方を想像しておかなければならないという条件が生まれてきているといえるだろう。同じ職場の同じ職種の男女であればその忙しさや収入は容易に想像できてしまう。そのことが職場恋愛の減少の要因であり、男女が出会える場が増えるというだけでは今の恋愛の発展には繋がらざらぬということの示しにもなっている。

### 1-9 「恋愛・性・結婚」の一体化と分化

恋愛と結婚は別化ということに先ほど触れたが、「恋愛・性・結婚」のつながりに関する考え方の今と昔についてみていく。

日本では明治時代に「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」（恋愛・性・結婚の三位一体化）の考え方が入ってきた。高度経済成長期以降に根付くこととなる。1970年代までそういった「恋愛、性は結婚したものの同士の間でのみ、行われるべきである」というように恋愛・性・結婚は一体でなければならないという考えがあった。見合い結婚による結婚の文化がまだまだ残っており、「恋愛は結婚してからすればいい」という考えが根強かったといえる。しかし、1980年代以降、性と恋愛の解放（自由化）が進むようになる。「必ずしも恋愛、性と結婚は結び付かなくてもいいのだ」という考え方が誕生し始めたのである。この性と結婚の分化の要因といわれるのが、バブル景気と欧米、特にアメリカの影響である。バブル期に欧米から入ってきたファッションスタイルやブランドの流行が起こった。また、留学や海外旅行も流行し、1990年には海外旅行客数がはじめて年間1000万人を超えたというデータもある。ハリウッド映画の影響も大きく1980年代～1990年代に日本でヒットしたハリウッド映画にも恋愛を扱うものが多かった。欧米の文化とともに欧米の自由な恋愛や自由な性が日本に入ってきたのである。バブル期の若者はそのような欧米的な自由な恋愛にあこがれた。当時のトレンドドラマのブームも欧米の影響といわれている。

### 1-10 理想の相手像・相手に求めるものの変化

交際している異性がない割合が高くなり、未婚率が上昇している現実があるが、実際交際する相手や結婚する相手にはどのようなものを求めているのだろうか。

1980年代後半から1990年代にいわゆるバブル世代の女性の間で、「三高」という言葉が流行した。この「三高」というのは女性が交際相手や結婚相手に対して求める条件の総称で「高収入」、「高学歴」、「高身長」、の3点を指す言葉である。バブル世代はこのように見えやすくわかりやすい条件の男性を求めている。しかし、その後の女性は「三高」ではなく、「三低」を男性に求めるといわれている。「三低」とは、女性に対して「低姿勢」、家事などは自分でこなす「低依存」、資格などを有し、職の安定が望まれる「低リスク」のことを指す。「三低」に現れるのは今の日本の社会状況に対する不安感であり、みなその不安感から逃げようと恋愛やその相手においても安定を求めているということが少し読み取れる。男性に対する条件である「三低」であるが、「三高」に比べ、相手からはっきりと見えるも

図 1-8 女子高校生の結婚相手に求める条件比較

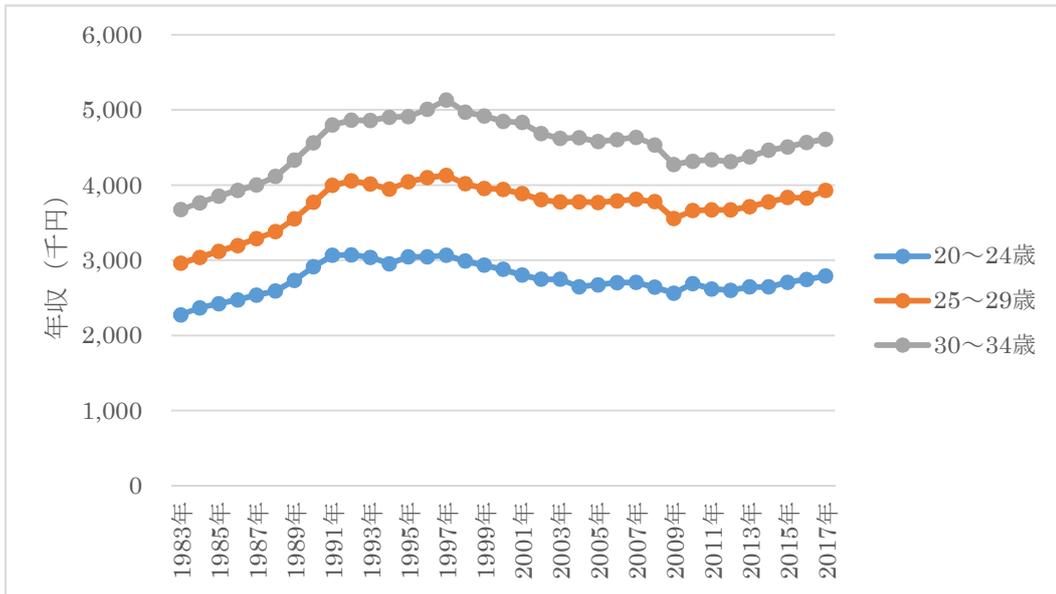
1989年			1996年			2018年		
1位	優しい 顔が好み	39.3%	1位	優しい	44.5%	1位	優しい	35.8%
			2位	顔が好み	41.5%	2位	自分のことをずっと 愛してくれる	25.7%
3位	高身長	17.1%	3位	誠実 頼りになる	14.0%	3位	安定した仕事に 就いている	24.8%
4位	高収入	16.4%				4位	顔が好み	21.1%
5位	収入	15.0%	5位	高身長	12.2%	5位	清潔感がある	19.3%

のではなく判断しづらいものであるといわれている。収入や身長、学歴は聞いてしまえばはっきりとわかりやすく見えてくるし、簡単に比較もすることもでき、この人と付き合おうだとか結婚しようという決断までに至りやすかったのかもしれない。「三低」の条件が見えにくく、比較しづらいことも交際や結婚まで至らない要因といえよう。また、先にも述べたように恋愛＝結婚というつながりが強くなっているため、その見極めは非常に重要となってくる。そのため交際までなかなか踏み出せない状況が生まれてきている。交際相手に求める条件は大きくこのような変化を遂げた。以下は、1989年、1996年、2018年の女子高生に結婚相手に求める条件の上位5位を表したものである。

1989年の上位には「三高」のうちの2つがランクインしている。1989年と1996年では特に大きな差はなく、内面に関するよりも顔や身長といった外見に関することが重視されていることがうかがえる。しかし、2018年では「安定した仕事についている」という項目が急に上位にランクインしてくるのである。ここにもやはり、社会や将来に対する今の若者の不安感が表れているといえる。

次に男性が交際相手や結婚相手に求める条件についてどのようなものがあるか見ていく。男性が交際相手に求める条件として「4K」という言葉で表される場合がある。「4K」とはかわいい・家庭的・かしこい（この場合の賢いは学力ではなく家事管理能力を指す）・（体重が）軽いという4点の総称であり、これは以前から言われている。現在でも求める条件として大きな変化はしていない。しかし、最近ではこの「4K」が「5K」になった。つまり、交際相手を選ぶ基準が増えたといわれているのである。そのもう一つのKというのは経済力のことである。やはり、女性の社会進出という面が大きいのであろう。そして、男性の収入だけでは、家計を支えられなくなったことの表れであるともいえる。実際、1990年代後半から緩やかに収入は減少している。

表 1-2 男性の年齢別収入の変化



出所：国税庁 民間給与実態統計調査結果より筆者作成

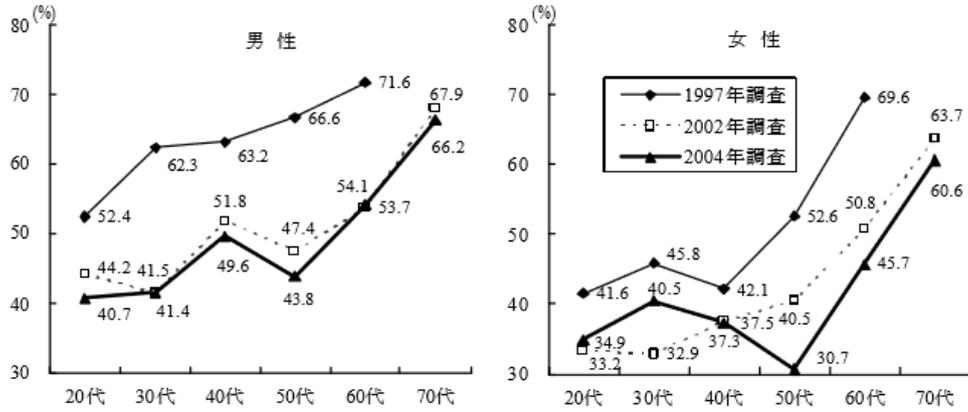
加えて、ここから以前の男性は経済力、女性は家事管理能力というような性別役割分業の考え方が変化していることも表れている。女性の交際相手・結婚相手の条件として「三低」の一つである「低依存」が含まれるのもそのためであろう。男女ともに「経済力」「家事管理能力」が必要になってきており、男女間のこうすべきという役割の差が薄れつつあるといえる。

以上からみえてくるのは、女性の変化と男性の変化に大きな差があることである。女性の働き方・ライフスタイル・制度や法律が時代とともに大きく変化したことが恋愛の在り方に大きく影響を与えているといえるだろう。

### 1-11 男女の役割の変化

以前から言われているのは“男性は外で働き、女性は家庭に入り家事をする”という性別役割分業の形である。先にも述べたようにその形の変化が恋愛に大きな影響を与えていることが考えられる。実際にどのようにその在り方が変化したのだろうか。以下は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という問いに対し賛成と答えた人々の割合を示したものである。

図 1-9 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」に賛成と答えた割合の変化



出所：性別役割分業意識の変化 —若年女性にみられる保守化のきざし—

男女ともに賛成と回答している割合はどの年代でも減少している。その考え方は変化してきているのである。特に年齢が低いとこの考え方について賛同しない割合が高い。70代と20代で比べるとその差は歴然である。女性が恋愛を経て、結婚、その後子育てに専念し、職場には復帰しないという流れが以前はあったが、今は職場復帰が当たり前になってきていることの広がりを見せている。また、そのことが女性だけでなく男性にも強くなっているということにも注目したい。男女どちらかがこうあるべきであるというこうした性別役割分業に対する意識の変化が先に挙げたような異性に求める基準に実際に影響を与えていることは間違いないだろう。

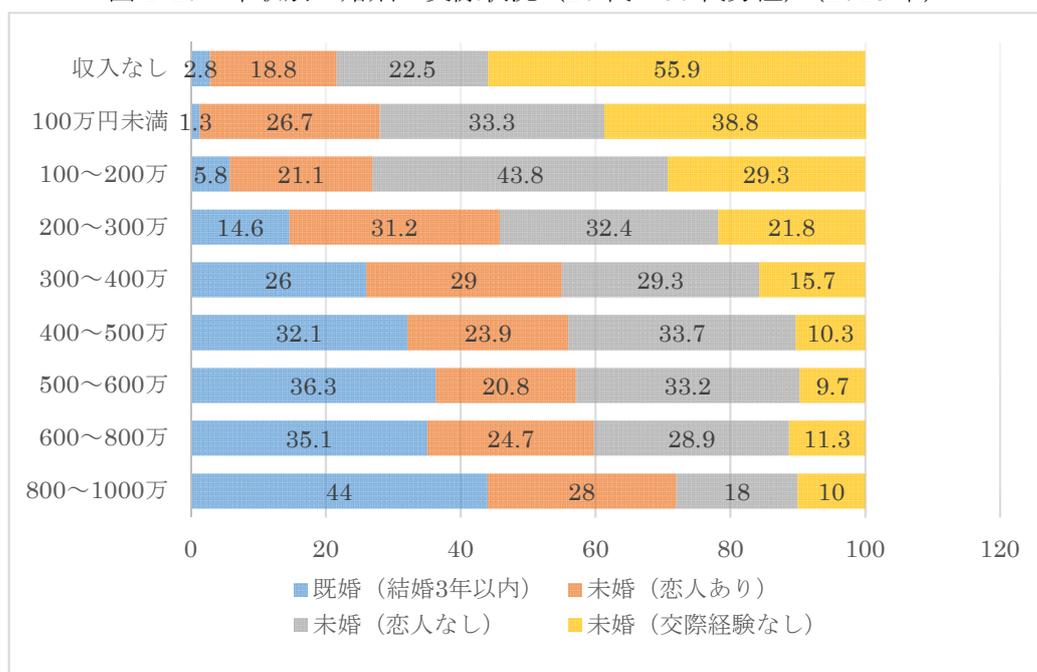
## 1-12 恋愛と収入

『バブル世代』と『今の世代』の金銭感覚のちがいがよく出るもの」はなにかという調査のなかで1位となったのは「デート代」であった（マイナビウーマンによるアンケート調査より引用）。男性であれば、デートのたびにプレゼントを渡す「プレゼント攻撃」によって周囲と差をつけようということがよくあった。また、「クリスマスデートはどのように過ごしたか」という調査では、現40代以上いわゆるバブル世代の人々がバブル期のクリスマスデートの過ごし方について「外食で豪華なクリスマスディナーを食べた」という回答が67%と最多で、次いで「ドライブ」35%、「シティホテルに泊った」20%という回答がでた。その一方、現20代・30代は「夜景・イルミネーションを見る」という回答が48%を占め最多で、次いでバブル世代に最も多かった「外食で豪華なクリスマスディナーを食べる」が39%、また、「普通の外食」が38%という回答であった（マクロミル2010年クリスマスに関する調査より引用）。

以上の二つの調査結果より読み取れることは、バブル世代と今の若者とで恋愛に対するお金のかけ方が異なることであり、また、恋愛に対する意識の違いである。

お金をかけるもの＝個人にとって必要と考えるものであると筆者は考えている。そのためデート代に差が出ているという回答やクリスマスデートにおいてお金がかからないようなデートが高い割合を占めるようになったことは若者にとって恋愛がさほど必要なもの、または重要なものとしてとらえがたくなっていることを象徴していると考えられる。趣味も多様化している現 20 代・30 代、そちらにお金をかけたいという希望もあるのだろう。

図 1-10 年収別の婚姻・交際状況（20 代・30 代男性）（2013 年）



出所 牛窪（2015：157）

一方で考えられることは、恋愛にかけられるお金が少なくなったことである。かつて恋人とのデート代に充てられたお金は生活費に代わっているということだ。そもそも恋愛にはプレゼントやデート代のようにお金がかかる。恋愛は収入に大きく左右されるのである。図 1-10 からわかるように、収入の差によって恋人の有無や結婚できるかできないかということ自体が左右される。収入がなければ恋人ができないというよりも、収入が少ない人は恋愛をする余裕がないという状況があると考えられる。

### 1-13 小括

恋愛といってもその考え方や見方はさまざまである。本論文並びに本章では、異性との恋愛に焦点を当て、そこから交際関係、結婚という部分についてみていった。「恋愛離れ」という言葉をよく耳にするようになったが、実際に交際相手を持たない男女が増えており、また未婚率が高いこともあって、恋愛および交際・結婚というものから多くの人々が離れていることを見て取ることができた。その要因として、恋愛＝結婚というつながりが深くなり、恋愛に対するハードルが高くなったことや女性の社会進出に伴って交際相手・その先の結婚相手を選ぶ基準が見えづらくなったことがある。いずれにしても、恋愛は個人で

するものでありながら社会の変化の影響を大きく受けるものであるということが結論付けられる。制度の変化や社会の変化の影響を受け、人々は、劇的な出会いを求めなくなり、非常に優れた容姿よりも内面の魅力や個人が持っている能力を求めるようになった。また、収入・キャリアプラン・相手の家族構成など恋愛に発展するまで見極めなければならない要素が増えた。言い換えれば、他人と競争するための要素の複雑化でもある。したがって、恋愛における競争の中で自分に身につけなければいけない魅力が多くなればならなくなってしまうのである。この変化は恋愛から人々が離れる大きな要因ともいえる。

相手に多くの基準を作り、求めるようになった。人々はその基準から本当に安心できる相手なのかを見極めようとしている。人々は恋愛に対して何よりも安定を求めているのだ。その傾向は年々強くなっているといえるだろう。

また、大きく今と昔ではそもそも恋愛の捉え方が違っている。特に自由恋愛が強まった時期であるバブル期には、恋愛は若者のステータス、かつ、必要なもの楽しいものとみなされており、かけるお金も今とは比べ物にならないものであった。2000年以降は結婚のためにしなければならないもの、恋愛は必要だが何よりも楽しいものではないという見方が強い。求める恋人像からもうかがえるように若者は理想・夢を追いかけるスタイルから現実主義的な考え方へと変化を遂げたのである。

## 第2章 テレビ視聴の変遷

本章では、テレビの特徴と年代ごとの視聴変化に注目する。

### 2-1 テレビの歴史

テレビとは端的に説明すると動画のテクノロジーである。画像を電気信号に変換して送信し、受信側で受像管上に画像として再現するものであり、また、その受信装置である。送信には有線・無線があり、放送・通信・遠隔監視などに用いられる。以下は、テレビ放

表 2-1 テレビの歴史

年代	主なできごと
1953年	2月に日本放送協会（NHK）がテレビ放送を開始する。 8月に日本テレビ東京局が開局され、民放テレビ放送を開始する。
1957年	テレビが電気洗濯機、電気冷蔵庫と並び『三種の神器』として宣伝される。
1960年	NHK・民放各局でカラーテレビの放送を開始する。
1964年	東京オリンピックの中継が行われ、話題となる。
1969年	アメリカの宇宙船アポロ 11号が月面着陸に成功し、宇宙中継が行われる。 日本で月面着陸の瞬間を同時中継で見た人は、NHKの調査によると、NHK・民放合わせて68.3%にのぼった。
1989年	BSアナログ放送が開始される。
1996年	CSデジタル放送が開始され地上波以外の放送が充実し始める。
2003年	地上デジタル放送が開始し、地上デジタル放送・BSデジタル放送・CSデジタル放送の3波のチューナーを内蔵したデジタルテレビが発売される。
2006年	地上デジタル放送の携帯・移動端末向けサービス「ワンセグ」本放送が開始される。
2011年	7月に、地上アナログ放送、BSアナログ放送が終了し、地上デジタル放送へと完全移行する。白黒放送開始以来、約60年にわたるアナログテレビ放送が終了となる。 12月に、表示パネルの画素数がフルHDの4倍ある高画質なテレビ、『4Kテレビ』が市場に登場する。

出所：スカパーJSATワールドより筆者作成

送にかかわるできごとをまとめたものである。

## 2-2 テレビの特徴

映像という観点から見ると、テレビと映画は近いものがあるようにも思えるが、実際は、その構造から大きく異なっている。テレビと映画の大きな違いは、私的空間にいなから公的な出来事を見ることが可能という点である。映画よりもより身近に情報を得ることができ、自宅で視聴できるという特徴から、テレビの前で話し合いながら見ることもできるのも大きな特徴といえる。そのようなことから、テレビは大衆にリアルタイムで見ると同時に、擬似的な参加をもたらし、互いに面識のない人々の間に共同性を感じさせることができる。また、テレビは時間ごとに区切られた番組によって編成されていることも特徴である。

テレビ放送は、一方向的に電波を発信する送り手はその流す内容＝番組を決定している。それは、番組の編成によって人びとの生活時間を規定していくものになる。例えば、ゴールデンアワーと呼ばれる時間帯（おおよそ 19 時から 22 時ごろまでを指す）がある。1963 年にはこの時間帯に NHK で大河ドラマの放送が開始された。一家団欒での視聴を意図した番組が放映され、視聴者の側もゴールデンアワーの番組を、一家団欒で見るとして享受していった。

テレビによる時間の規定はゴールデンアワーだけではない。1961 年から NHK の「連続テレビ小説」は、通称「朝ドラ」と呼ばれ、その放送時間が意識されているのである。テレビの番組編成は人びとの生活リズムをつくりだすものになった。生活の時間が先にあるのではなく、こうしたテレビの時間によって人々は日常の時間を確認し、編成することになったのである。

これらの特徴はテレビが身近にあるからこそ感じられるものであり、テレビが家庭にあって当たり前であること、または、当たり前になっていったことを表しているといえるだろう。だからこそほかの視聴者とも共感しあえるし、その時間に合わせて人々が動こうという意識も生まれたと考える。

## 2-3 テレビの特徴の弱まり

テレビから感じられる共同性や時間規定という特徴は現在、薄れつつあるといわれている。理由として挙げられるのは、まず、録画機能及び録画機器の普及や機能の向上である。テレビ自体に録画機能を備えているものも登場しており、録画をしてリアルタイムでなく好きな時間に好きな番組を観るというスタイルが定着してきているのである。ここには 1 章でも触れたような男女ともに働くという意識が強くなったことや、趣味の多様化などの生活スタイルの変化が録画機器の普及や、機能向上の後押しをしていると予想される。人々が自分に合った時間で好きなようにテレビを視聴するようになってきていることはテレビのもともとの特徴を失わせる要因になっているといえるだろう。

次に挙げられるのはインターネット、加えてスマートフォンの普及である。テレビから

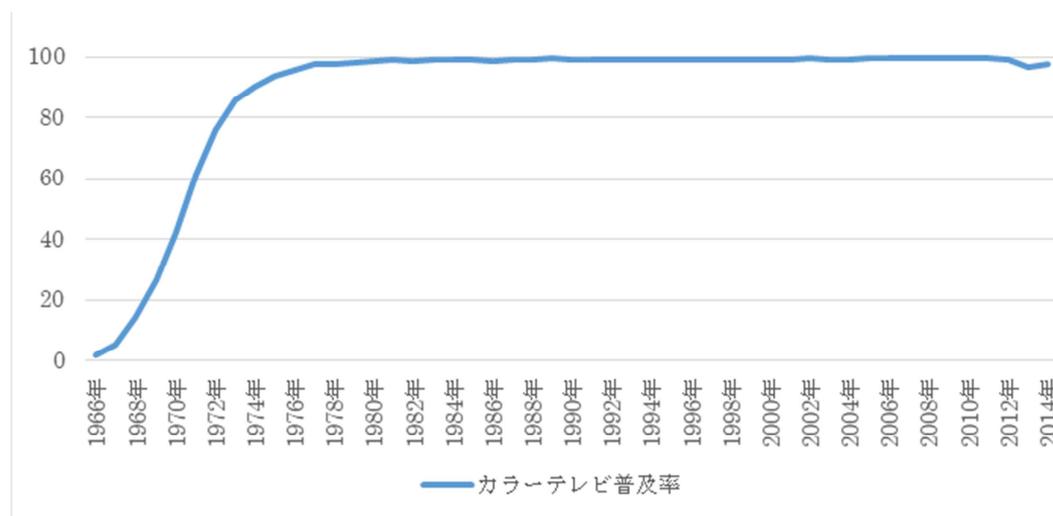
映像に触れるのではなく、インターネットを介して、スマートフォンやパソコンを通してテレビで放送されている番組などを含んだ映像を視聴するというような変化が表れている。そもそも、テレビから映像を視聴しないという形が生まれ、テレビの特徴を失わせている。これまで動画視聴サイトは数多く生まれてきた。YouTube はその中でも人気であり、動画を YouTube にアップする YouTuber が小学生の将来なりたい職業ランキング (2017 年日本ファイナンシャル・プランナーズ協会による調査) にて 6 位にランクインするほどまでになっており、その影響力の大きさがうかがえる。また、近年では、YouTube に地上波で放送を行っているテレビ局が公式のチャンネルを作り、テレビ番組の予告や本放送の一部をアップしている。YouTube での動画視聴から地上波のテレビ放送の視聴へとつなげようという動きがみられるのである。インターネットからテレビへとつながりを持たせようとしているこの動きはインターネットによる動画視聴、映像視聴にテレビが押されていることを表しているといえるだろう。また、YouTube のみならず様々な動画視聴サイトやインターネットテレビ・インターネット放送が近年急激に普及し始めていることも要因と予想される。インターネットによるテレビ視聴については後で触れる。

大きくこれらの理由から、テレビ視聴の在り方が変化し、テレビという媒体の特徴が薄れ、世代によってもテレビという存在の捉え方が変わってきていることが予想される。以下についてはさらにテレビ番組の視聴スタイルの変化についてみていく。

## 2-4 テレビ視聴の在り方と変化

まずテレビの普及率や保有台数についてみていき、その変化について追っていく。以下はカラーテレビの普及率である。

図 2-1 カラーテレビ普及率



出所：帝国書院 HP より筆者作成

カラーテレビは 1970 年代に急激に普及している。その後はほとんど 100%に近い普及率を保持している。しかし、若干ではあるが 2010 年より普及率が下がっていることが分かる。な

ぜ、普及率が微減しているのだろうか。そのことについては以下で触れる。

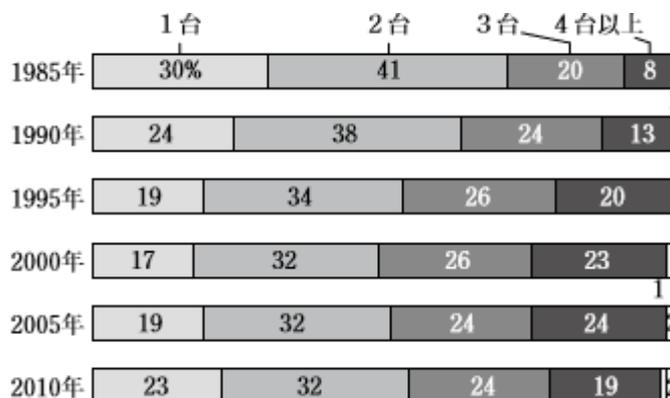
次に、テレビの保有台数についてもみていく。テレビの普及率が100%近くなった1985年は、2台保有している割合が最も高く、家庭内で自分の見たい番組がほかの人に邪魔されることなく見ることができるようになったと考えられる。その後は4台以上を保有している家庭が増加しており、より一層自分の好きなものを自由に見ることができるようになった。

しかし、注目したいのは、4台以上が増加した後、1台の割合が増加していることである。

これは、単純に1世帯当たりの世帯人員が減少したことが影響していることがまず考えられる。実際、世帯数自体は年々増加しているが、世帯人員は減少し、1985年が3.17人だったのに対して、2010年では2.46人となっている（平成27年国勢調査より）。近年増加しているのが、テレビを保有していない人たちだ。2018年に株式会社サイバーエージェントが実施した調査では、「テレビを持っていない、または一ヶ月以内に視聴なし」と回答した20代は15%に上る（株式会社サイバーエージェント オンラインビデオ総研テレビ接触頻度調査より）。

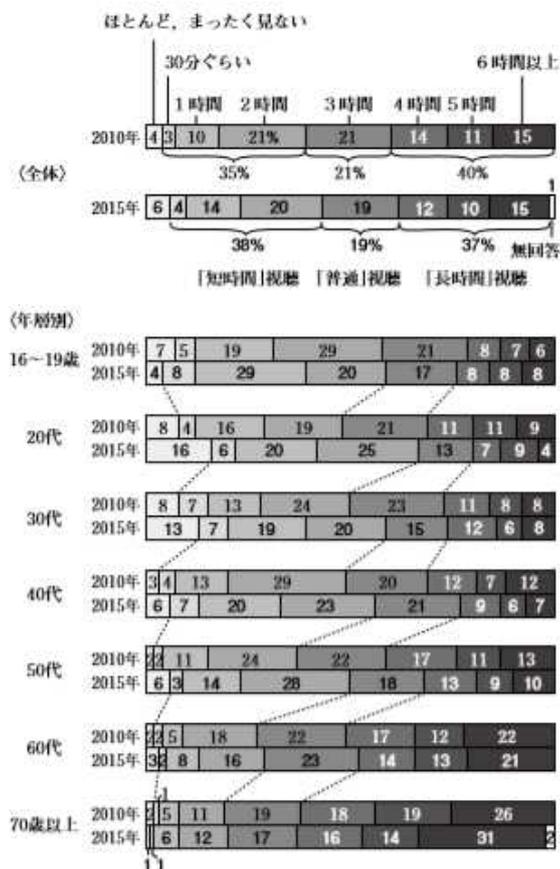
このことからテレビ視聴から少しずつ人々が離れていることが想像される。この家庭内におけるテレビの保有台数の減少は、2000年代以降からインターネットが普及し

図 2-2 カラーテレビの保有台数の変化



出所：「テレビ視聴とテレビ利用の現在」  
～「日本人とテレビ・2015」調査から～

図 2-3 年齢別 1日のテレビ視聴時間



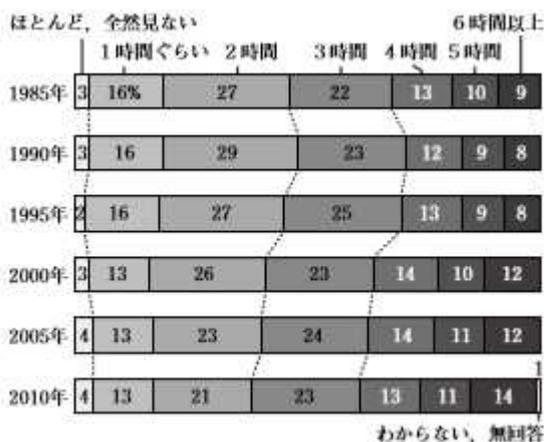
出所：テレビ視聴とテレビ利用の現在  
～「日本人とテレビ・2015」調査から～

始めたことがその要因ではないかと予想される。

また、テレビの保有台数の他に变化した点として、テレビ番組の視聴者層の変化がある。「若者のテレビ離れ」という言葉をよく耳にするがそれは実際どの程度のものなのだろうか。図 2-3 は 1 日のテレビ視聴時間（ここではビデオや DVD、録画したものの再生は除く）を年齢別に表したものである。70 代以上を除くと全体的に長時間視聴するスタイルから、短時間視聴するスタイルへと 5 年の間で変化している。加えて、年齢別にみっていくと、40 代以上から 2 時間以上視聴する割合が高く、50 代以上になる一層その割合が高くなる。やはり、年齢が高くなるに連れて職や子育てから離れ、自由に過ごすことのできる時間が増えるためこのような視聴時間になるのであろう。一方、20 代・30 代はやはり働く世代であるため視聴の時間は短い。日々の忙しさがうかがえる。男女ともに働くことが一般化してきている世代であるため一層テレビを視聴する人は減っているのだろう。

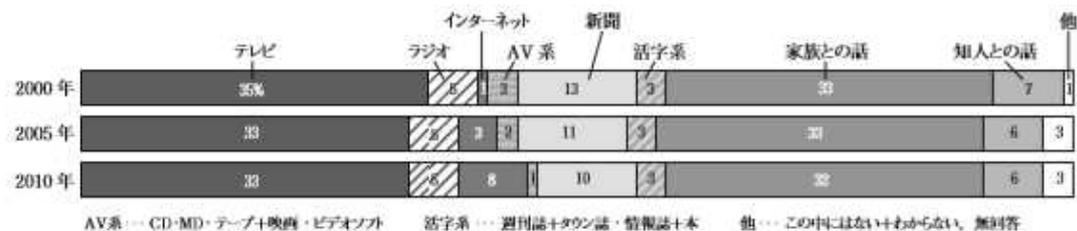
全体での 1 日の視聴時間を見ていくと、6 時間以上のテレビ視聴が増えている。そのため、全体の視聴時間も長くなっているように見えるが実際はそうではない。この 6 時間以上のテレビ視聴を行っているのは、60 代以上の年齢の人々であり、高齢者の視聴時間の増加と社会全体の高齢者の増加が表れた結果であるといえる。一方で注目したいのは、「ほとんど、全然見ない」の割合が増加していることである。この項目は 20 代～50 代の幅広い世代で増加しており、結果として全体でみると視聴時間は短くなっている。1985 年では年齢に偏りなく、幅広い世代がテレビを日常的に視聴していたといえ、現在よりもメディアとしての有効性・影響力があったのではないかと予想される。それは、特に若年層で、現在よりも差があるといえるだろう。

図 2-4 普段 1 日にテレビを見る時間



出所：テレビ視聴とテレビ利用の現在  
～「日本人とテレビ・2015」調査から～

図 2-5 欠かせないメディア



出所：テレビ視聴とメディア利用の現在 (2) ～「日本人とテレビ・2010」調査から～

しかし、視聴時間に（特に若年層で）変化はあったものの依然として、メディアとして必要とされている事実もある。図 2-5 で見ても、テレビは欠かせないメディアとして一番高い割合を占めており、それは 10 年間で変わっていない。メディアとしての在り方が変化しつつあってもその必要性は変わっていないといえる。また、テレビの社会への影響力については 9 割以上の人々が「影響力がある」と「日本人とテレビ・2010」調査において回答しており、テレビがメディアとしての効力を失ったわけではないことが分かる。むしろその影響力自体はいまだに大きい。一方で、欠かせないメディアとして、インターネットの割合が上昇しており、人々がインターネットをより活用していくようになることが予想される。また、この欠かせないメディアでインターネットと回答した割合は 16 歳～29 歳の若年層で高い。

テレビはもともと速報性に優れているという評価が高かったが、現在はインターネットの誕生もあり、その特性が弱まっている。しかし、速報性が弱まった一方、わかりやすさと伝達力という面ではほかのメディアよりも優れているという評価がなされており、目と耳から入ってくるテレビはその点では内容が頭に入ってきやすく伝わりやすい。テレビが獲得している大きな良さでもある。だが、インターネットによる映像の視聴というスタイルが広まっていった場合、テレビの速報性やわかりやすさ・伝達力のすべてを獲得した媒体が広がることと等しく、テレビの必要性が薄れてしまう可能性が考えられる。テレビという存在自体の今後が危うくなってきているといえるだろう。

## 2-5 インターネットテレビによるテレビ番組の視聴

人々にとって身近なメディアとなったインターネットであるがテレビにとって代わるようなものなのかをインターネットを介した映像の視聴についてみていき、考えていきたい。近年、インターネットテレビが増加しており、その人気は急激に上がっている。

インターネットが普及、その後スマートフォンが発売され瞬く間に日本に広がっていった。そこから予想されるのはインターネット回線を介し、スマートフォンを利用した映像の視聴スタイル（地上波で放送されたテレビ番組を含む）の広まりである。スマートフォンは 2010 年より日本で販売されるようになった。発売された当初の 2010 年は 9.7%とその普及率は 10%にも満たなかったが、5 年後の 2015 年には 72%の普及率を誇っている（総務省平成 29 年版情報通信白書 情報通信機器の普及状況より）。5 年余りで普及率は 7 割を超え、急激に日本にスマートフォンが広まった。テレビの普及率は 2010 年以降微減しており、スマートフォンの普及が少なからず影響を与えている可能性があることが予想される。また、その広まりはインターネットをより手軽に利用できるように促した。

インターネットテレビとはその名の通りインターネット通信網を介して映像が配信され、その映像を視聴するというものである。テレビで映像を視聴するのとは異なり、ほとんど時間の規定なく自由な時間で視聴できること、配信された映像ないし地上波で放送されたテレビ番組の映像をダウンロードし、どの場所にも見ることができるとその特徴

として挙げられる。見られる番組はすべてではないが地上波放送と同じでありながら、時間規定や共同性といった従来のテレビの特徴に縛られることはない。スマートフォンやタブレット、PCでの視聴が基本となっている。

インターネットテレビは、テレビ番組を地上波で放送している放送局が運営している場

表 2-2 インターネットテレビの種類

名称	サービス開始年	運営会社	料金
フジテレビ オンデマンド (FOD)	2005年	フジテレビジョン	コースにより異なる 月 300円～2000円
GYAO!	2009年	株式会社 GYAO (民放5社含む8社で設立)	無料 (配信期限がある)
日テレ オンデマンド	2010年	日本テレビ放送網株式会社	無料～2000円 (無料のものは配信 制限がある)
Hulu	2011年	HJホールディングス株式 会社(日本テレビを含む6 社で設立)	月 933円
Abema TV	2015年	株式会社 AbemaTV (テレビ朝日含む 2社で設立)	無料
Tver	2015年	株式会社プレゼントキャス ト(民放5社を含む9社で 設立)	無料 (配信期限がある)
Netflix	2015年	Netflix 株式会社	コースにより異なる 月 800円～1800円
Amazon Prime Video	2015年	Amazon Services LLC	月 400円 年 3900円
Paravi	2018年	株式会社プレミアム・プラ ットフォーム・ジャパン (TBS、テレビ東京を含む6 社で設立)	月 925円

筆者作成

合と企業が運営している場合があり、その運営している会社もさまざまである。また、料

金がかかる場合とかからない場合があったり、配信している番組も異なっていたりする。運営会社にテレビ局を含む場合はそのテレビ局が放送したテレビ番組を配信することがほとんどである。

主にスマートフォンが発売された2010年以降サービスを開始したものが多い。テレビ局が先駆けてサービスを開始しており、TBSも2005年よりTBSオンデマンドという名称で番組配信を行っていたが、現在はTver・Paraviにて配信を行っている。有料のものが多くが広告費のみで収入を賄い、無料での番組配信を実現させているものもあり、金銭的な面でインターネットテレビに強みがあればより一層インターネットテレビが普及、また、そこからの映像視聴が広まることは大いにあり得るだろう。今後、さらに注目を浴び、利用者が増えることが予想されている。

地上波で放送された番組を個人の好きな時間で視聴できるようになってきている。このことは、集団で共有するのではなく、個人が個人で楽しむことへのシフトを表しているといえ、今の若者の個人志向的な考えの表れでもあると考えられる。

## 2-6 人気のテレビ番組

テレビの地上波放送が開始されて60年近く経ち、さまざまなテレビ番組が放送されてきた。その中でもどのような番組がみられてきたのかここでは注目したい。

よく見る番組種目を複数回答したものである。「ニュース・ニュースショー・報道番組」、「天気予報」、「ドラマ」の順で見られている。その中でも割合が上昇しているのは、「天気予報」と「ドラマ」の項目のみで、他は横ばいまたは減少している。そもそもテレビを見る時間が減少している傾向にあるため、この結果は妥当であろう。速報性という特性がインターネットに変わってきているということもあり、報道をよく見る番組とする人は減っている。

一方で、ドラマがよく見る番組としての割合が上昇している。全体的に視聴率が低下している中でも、人気があり、よく見られている。ドラマはほか

図 2-6 よく見る番組種目



出所：テレビ視聴とテレビ利用の現在～「日本人とテレビ・2015」調査から～

のジャンルの番組よりもある程度は影響力が大きいと考えられ、そのことは若干であるが強まっている。

ビデオリサーチによる視聴率調査が始まったのは1962年である。それ以降調査の中で最も視聴率を獲得した番組は、1963年に放送された第14回NHK紅白歌合戦で視聴率は80%を超えた。次いで歴代の視聴率ランキング2位以降は東京オリンピック（1964年）、FIFAワールドカップ（2002年）、プロレス（1963年）、世界バンタム級タイトルマッチ（1966年）といったように、スポーツに関する番組なのである。放送された年代こそ偏りはあるがかつてはスポーツ番組が人気であったことを象徴としている。スポーツ番組には一体感を持ってみる事ができるという特徴がある。歴代の視聴率のランキングにはテレビの特徴である共同性という特徴が表れているといえるだろう。

最新の視聴率のランキング（ビデオリサーチによる調査、2018年12月17日（月）～12月23日（日）、関東地区）を見ていくと、連続テレビ小説まんぷく（21.9%）、笑点（18.0%）、日曜劇場・下町ロケット（16.6%）、全日本フィギュアスケート選手権2018女子フリー（16.6%）、サンデーモーニング（16.4%）といったように、ドラマ、バラエティーがよく見られている。また、同年の夏季（ビデオリサーチによる調査、8月6日（月）～8月12日（日）、関東地区）の場合でも、連続テレビ小説・半分、青い。（24.5%）、NHKニュースおはよう日本・首都圏（17.7%）、世界の果てまでイッテQ！（16.8%）、NHKニュース7（16.5%）、首都圏ニュース845（15.5%）の順で、スポーツ番組は視聴率の上位には入っていない。いずれにしても、図2-6で表されたように、報道番組、ドラマ、バラエティーがよく見られていることは確かである。また、報道番組やNHKの「連続テレビ小説」（朝ドラ）であるまんぷくや半分、青いが視聴率上位に入っていることは、これらの朝（ここでは8時～10時）の番組の時間規定的な機能が残っていることを示している。それ以降の時間、決まった番組を見るという視聴の形が薄れているともとらえられる。夜の番組の時間規定の薄れが感じられるのは、視聴率の低下と数々のゴールデンタイムの番組終了に表れている。

1980年代に高視聴率を獲得しているのはバラエティー番組・音楽番組である。バラエティーでは、特に「8時だヨ！全員集合」や「欽ちゃんのどこまでやるの！」は最高視聴率40%を超える。音楽番組では「ザ・ベストテン」や「夜のヒットスタジオ」が人気であった。以上に挙げた当時のバラエティー番組や音楽番組は年齢偏りなくみられる内容のものが多い。みんなで楽しめるような番組が当時は人気だったようである。また、家庭内での共通の話題作りの役割が強かったのではないかと考えられる。1990年代に高視聴率を獲得しているのが、ドラマである。特に1990年代では恋愛ドラマが人気となる。ドラマは1980年代に人気だったバラエティー番組や音楽番組とは異なり、個人個人で見たいものが異なる。共有するものから個人で楽しむものへと移行していったことが予想される。2000年代以降では、目立って人気のジャンルもなく、1980年代や1990年代と比較するとどの番組でも比較的視聴率が低くなっている。

## 2-7 テレビドラマの歴史

テレビドラマという言葉は、日本で作られた言葉であり、英語で同様のものを指すためには、「テレプレー」や「ティービー・ショー」などの言葉が用いられる。1940年に日本初のテレビドラマの実験放送が行われた。「夕餉前<sup>ゆうげ</sup>」という12分間のホームドラマである。出演者は母親と息子、娘の3人のみで、娘が嫁に行く前のある日、家族は食卓を囲んでしみじみとこれまでを振り返るといふ物語である。そこから日本のテレビドラマの歴史が始まっている。戦後話題になった作品として挙げられるのは、1958年に放送された「私は貝になりたい」であり、TBSに現存する最古の作品である。このテレビドラマ作品は多くの賞を受賞し、視聴者に強い印象を与えた。その後、1960年代にかけて多くのテレビドラマが作成・放送されるようになる。1960年代では「家族」をテーマとした作品が多い。これは単純に家庭におけるテレビの保有台数が1台にも満たなかったこと影響していると考えられる。家庭にテレビが1台しかないため、必然的に家族が揃ってテレビ番組を視聴することとなり、子供から大人までのどの年齢層がみても受け取ることのできる作品を放送局は送り出そうとしていた。また、この時代には、時代劇が多く放送される。水戸黄門が1960年代にテレビドラマ化され、放送された。

1970年代に入ると「赤いシリーズ」が流行する。「赤いシリーズ」とは、1974年から1980年まで放送されていたシリーズでテレビドラマ9作品、スペシャルドラマ1作品の計10作品からなるシリーズである。その名の通りドラマのタイトルすべてが「赤い」から始まる。内容としては、家族などを大きな題材とし、サスペンスの要素が盛り込まれたものであり、シリーズを通して宇津井健、山口百恵、三浦友和が出演し、大きな話題となった。

1970年代・1980年代には主に学校・家庭などにおける子供の非行を題材とした作品が多く作られ、高視聴率を獲得した。3年B組金八先生の第1シリーズが開始されたのが、1979年で、生徒の問題に向き合う教師の姿が描かれたり、1983年には少女の非行の問題を描いた積木くずしが放送されたりしている。

1990年代に入ると、101回目のプロポーズ、東京ラブストーリー、ロングバケーションなど恋愛をテーマにしたドラマが視聴率30%以上という高視聴率を獲得するようになる。このあたりになると、家庭にテレビが2台、3台ある場合が多くなり、家族揃っては見づらい恋愛のドラマも自由に視聴することができるようになったことが考えられる。

図 2-6 赤いシリーズ



出所：TBS チャンネル

その後 2000 年代には、ビューティフルライフ、HERO、GOOD LUCK、プライドといった、木村拓哉が主演を務めたドラマが高視聴率を得て話題となる。この辺りから物語や内容という面よりも出演している人物によって視聴率が左右されているように見て取れる。当時アイドルグループの SMAP が人気であり、SMAP のメンバーが出演している作品が軒並み高視聴率を獲得した。また、2000 年代の傾向としてシリーズ化されたものが高視聴率を獲得している。ナースのお仕事、救命病棟 24 時、ごくせんといった作品の続編が多く放送された。

## 2-8 テレビドラマの年代ごとの変化

以下では歴代のテレビドラマ視聴率ランキングについてみていく。なお、1977 年以降に放送されたテレビドラマの最高視聴率ランキングである。

表 2-3 歴代テレビドラマ（一般劇）視聴率ランキング

順位	放送年	番組名	番組最高 視聴率 (%)	放送局
1	1983 年	積木くずし・親と子の 200 日戦争	45.3	TBS
2	2013 年	日曜劇場・半沢直樹	42.2	TBS
3	2000 年	日曜劇場・ビューティフルライフ	41.3	TBS
4	1979 年	金曜劇場・熱中時代	40.0	日本テレビ
4	2011 年	家政婦のミタ	40.0	日本テレビ
6	1980 年	3 年 B 組金八先生	39.9	TBS
7	1993 年	ひとつ屋根の下	37.8	フジテレビ
8	2003 年	日曜劇場・GOOD LUCK!!	37.6	TBS
9	1977 年	赤い激流	37.2	TBS
9	1994 年	土曜グランド劇場・家なき子	37.2	日本テレビ
11	2001 年	HERO	36.8	フジテレビ
12	1991 年	101 回目のプロポーズ	36.7	フジテレビ
12	1996 年	ロングバケーション	36.7	フジテレビ
14	1987 年	男女 7 人秋物語	36.6	TBS
15	1978 年	ドラマ人間模様・夫婦	34.8	NHK 総合
16	1983 年	おしん	34.6	NHK 総合
17	1997 年	橋田壽賀子ドラマスペシャル 渡る世間は鬼ばかり	34.2	TBS
18	1980 年	グランド劇場・熱中時代	34.1	日本テレビ
18	1992 年	金曜ドラマ ずっとあなたが好きだった	34.1	TBS
18	1997 年	ひとつ屋根の下 2	34.1	フジテレビ

出所：ビデオリサーチより筆者作成

以上のランキングを見ていくと、高視聴率のテレビドラマがとびぬけて多い年代は特にはないようにみえる。しかし、2000年代以降の作品はほかの年代に比べると若干少ない。テレビ視聴自体から離れ始めていることが原因であろう。また、視聴率の上位の作品は家族をテーマとしている作品が多く、やはり大人も子供も共感しやすいものが上位に入ってくる。

## 2-9 小括

本章においてはテレビの特徴とまた、昔と今での視聴の変化についてデータをもとにみていった。そこからテレビの特徴である、共同性・時間規定・速報性が薄れつつあることが分かった。かつてのテレビの代表的な特徴が薄れつつあるということは、テレビに代わる媒体の影響が大きいことが示されているともいえる。本章ではインターネットに映像視聴に注目した。インターネットによる地上波で放送されたテレビ番組を含めた映像の視聴の広まりは時間に縛られることがなく、また、個人で楽しむことができ、従来のテレビの在り方とは逆を行く。スマートフォンの普及に伴ってインターネットテレビはより身近になってきている。昔は決まった時間に見るものであったのに対し、今は決まった時間に見るものではないというのが一般化しつつあるのである。

インターネットの出現によって、決まった時間でなくとも自由にテレビ番組を視聴することができるようになってきた。もちろんインターネットの影響力は大きくなってきているといえるが、実際はいまだにテレビ（テレビ番組）の影響力はあるというのも事実である。また、テレビ番組のジャンルの中でも、ドラマは報道や天気予報に次いで見られており、人々が番組の中でも影響を受けやすいものであると予想される。

昔と今ではテレビの存在感は変わったものの、映像を享受することをやめているわけではなく、その媒体の変化としてとらえることができるだろう。テレビ番組の映像から受ける影響は今も残っている。

### 第3章 年代ごと恋愛ドラマの描かれ方

本章においては、人気となった恋愛ドラマを抜粋し、その人気の背景を当時の視聴者で  
あると考えられる若者の特徴と恋愛の傾向から見ていく。それとともに、どのような恋愛  
傾向を映し出していたのかを人気ドラマから見ていく。なお、カラー放送が開始された1960  
年代以降のテレビドラマについて触れることとする。

#### 3-1 恋愛ドラマの人気

テレビドラマ歴代視聴率ランキング（ビデオリサーチによる調査より引用）によると、  
恋愛をテーマとしたドラマは、上位20位以内に、日曜劇場・ビューティフルライフ（3位・  
2000年放送）、101回目のプロポーズ（12位・1991年放送）、ロングバケーション（12位・  
1996年放送）、男女7人秋物語（14位・1987年放送）の4作品がランクインしている。全  
体から見るとさほど人気があるジャンルでもないようである。また、視聴率の上位にラン  
クインしているのは1987年から2000年の間の作品であるためおおよそ1980年代後半か  
ら1990年代の終わりまで恋愛ドラマが人気であったのではないかと予想される。なお以下  
は、恋愛ドラマの歴代最高視聴率ランキングである。

表3-1 恋愛ドラマ歴代最高視聴率ランキング

順位	放送年	番組名	番組最高 視聴率 (%)	放送局
1位	2000年	ビューティフルライフ	41.3	TBS
2位	1991年	101回目のプロポーズ	36.7	フジテレビ
2位	1996年	ロングバケーション	36.7	フジテレビ
4位	1987年	男女7人秋物語	36.6	TBS
5位	2000年	やまとなでしこ	34.2	フジテレビ
6位	1992年	ずっとあなたが好きだった	34.1	TBS
7位	1993年	誰にも言えない	33.7	TBS
8位	1992年	愛という名のもとに	32.6	フジテレビ
9位	1997年	ラブジェネレーション	32.5	フジテレビ
10位	1991年	東京ラブストーリー	32.3	フジテレビ

出所：年代流行より筆者作成

#### 3-2 1980年代以前の恋愛ドラマ

1960年代、1970年代いずれも恋愛を題材としたドラマの放送自体が少ない。家族、学校  
といったものをテーマとしたドラマが多いのである。このころはまだ、テレビコンテンツ  
はアメリカに頼っている部分があり、日本の自主製作が少なかったということが第一にあ

る。恋愛に関することに注目すると、この時期は見合い結婚の割合が恋愛結婚よりも高く、そもそも自由に恋愛するという考え方が世に広まっていなかった時期であったことが挙げられる。1970年代に入ると、ややその傾向は薄れていくが1970年代に入っても、恋愛ドラマの放送は増えなかった。恋愛ドラマの放送が少ない理由は、自己選択による恋愛が広まっていなかっただけでなく、カラーテレビの普及がまだ進んでいなかったことが関係している。1960年にカラーテレビでの放送が始まり、その当時の普及率は非常に低かった。1978年ごろになり、やっと100%近い普及率となる。まだメディアとしての地位をそこまで確立していないテレビで子供や高齢者が受け入れがたい恋愛をテーマとして扱うことは、非常にリスクを伴うことでもあったのだろう。また、世帯ごとの保有台数については1974年までカラーテレビを保有台数は1台持っているかどうかという状況で、2台以上保有することが当たり前になるのは1980年代以降である（内閣府 2004年消費者動向調査より）。すなわち1970年代までは、家にある1台のテレビで同じ番組を家族全員で見ることが当たり前のものであったと捉えられていたはずである。恋愛ドラマは内容や場面によっては家族そろってではなかなか見づらいものがある。そのため恋愛ドラマの放送が少なかったのだろう。

### 3-2-1 カラーテレビの登場から1980年代に入るまで

1950年代半ばから1970年代前半に日本は高度経済成長期を迎える。1964年の東京オリンピックは日本の経済成長を後押しし、また、その中継が行われることでテレビ普及のさらなるきっかけにもなった。この高度経済成長期の中心となったのは現在人口の一番大きな割合を占める「団塊世代」（1947年～1949年に誕生した世代）と呼ばれる人々である。高度経済成長を経て、経済的に成長した東京や大阪といった中心部には大学進学や就職のため地方から人々が流入することとなった。そして、都市部では、爆発的に人口が増えていった。これにより引き起こされたのが近所付き合いの希薄化であり、家族、親戚、隣人などとの伝承線の途絶えである。これらは、見合い結婚減少の大きな要因であり、人間関係を複雑化させた要因でもある。また、これにより、決まった人と出会い人間関係を構築するという構図が崩れ、偶発的に人と出会い、そこから人間関係を作っていく形が誕生した。この「関係の偶発性」は1970年代後半以降、人間関係構築の上で影響を与えることとなる。

その後の1970年代の後半には「新人類世代」が若者文化の中心となっていくが、それは1980年代前半の恋愛ドラマとともに見ていくこととする。

### 3-3 1980年代前半の恋愛ドラマ

この時期に恋愛ドラマが流行し始める。1985年には、一家庭当たりのテレビの保有台数は約7割が2台以上となっており、個人でのテレビ視聴が可能になったことが予想される。そのため、個人が好きな番組が見やすくなったのはこのあたりからであるといえ、このこ

とが一因となり恋愛ドラマが視聴されるようになったと考えられる。

この後流行する「トレンドドラマ」の先駆的作品が誕生し 20 代～30 代の若者の間で大きなブームが巻き起こる。トレンドドラマとは、明確な定義はないが、20 代～30 代の女性達をターゲットにした女性視点の華やかなドラマであると一般にはとらえられている。主人公および中心人物は主に美男美女の役者が演じていた。都会が舞台となっており、当時の女性たちの理想や夢が描かれている場合が多い。加えて、1980 年代前半の恋愛ドラマは学生や主婦が中心となっており、この当時の恋愛は比較的時間に余裕のある人ができる「特権」というイメージがついていたことが予想される。

以下ではその当時の若者像を見ていき、当時人気となった恋愛ドラマの人気の要因についてみていく。

### 3-3-1 「新人類世代」

この当時の中心にいたのは「新人類世代」（1961 年～1970 年に誕生した世代）と呼ばれる世代である。「新人類」という名称は今までの若者文化の中心にいた「団塊世代」とは異なった新しい価値観を有していることに由来する。生まれた時からテレビがあったり、漫画やアイドルのような文化に囲まれていたり、そもそも「団塊世代」とは生活環境が異なっていたことが価値観の差を作り上げた要因である。また、もともとこの「新人類」という呼称は、「旧人類」とは違い、「自分勝手・無感覚・シニカル」のようなマイナスイメージを含んでいた。そんな、「新人類世代」の若者の特徴として挙げられることは縦の関係性をそれほど重視せず、身近な同年代の仲間という横の関係の中での日常を重視することがあげられる。そして、その日常から自分の生き方を決定していくというスタンスが新人類世代の人々の中にはあった。

1970 年代後半より、「新人類世代」の姿が現れ始める。「新人類世代」の人々はそれ以前とは異なった人間関係を構築していく。先に触れた、地方からの人口流入とそれによる家族・親戚・隣人との関係希薄化が影響するためである。

1970 年代後半から 1980 年代前半に人間関係を構築する上で先にも触れたような伝承線の途絶えにより、モデルとするものを見失った。そのため、当時の若者はメディアから人間関係のモデルを獲得しようとした。1970 年代後半から 1980 年代のマンガの描かれ方から当時の人々の関係を表す変化を読み取ることができる（宮台他，1993）。

1970 年代後半に登場した青少年マンガでは、「日常の中の微細な差異」が描かれるようになったと宮台（1993）は指摘する。「『日常の中の微細な差異』への注目は、一方で自分の周囲にいる『変なヤツ』をも含めた多様な『他者の発見』を促した。こうして、世代内に引かれた多様な差異の線分に対する研ぎ澄まされた感受性が養われ、60 年代には可能だった『<若者>としての<我々>』という世代的同一性の意識が徹底的に掘り崩されることになった」（宮台他，1993:159）とあり、横の関係を重視し日常を過ごしながらもその中で個人と他者という意識生まれ始めることとなったことを表している。個人と他者という意

識の中で人間関係、仲間を作り上げていった。それを象徴するのが1980年代ごろに生まれるオタク文化であろう。みな同じ階級にあるという従来の考え方が崩れ出し、見えない差が意識されるようになったのはこのあたりからである。

「新人類的なもの」の特徴として同じくマンガから見られた特徴が、〈無害な共同性〉である。(宮台他, 1993:173) 例えば当時の恋愛マンガの中では男女数名の仲間の中で三角関係、四角関係、五角関係と恋愛関係が複雑化してもその仲間(共同性)が離れることはなく、崩れないまま物語が展開する。1970年代後半から1980年代前半にかけて先にも述べたように人間関係は複雑化し、関係が見えづらくなった。そのため、その関係性を短絡化させ、人間関係の複雑さを消し去ろうとしたことにより生まれた特徴と考えられる。

「新人類世代」の人間関係の変化についての流れは以下のようにまとめられる。①大卒の若者というまとまりから個人と他者というような見方に変化し他者性が上昇、②人間関係複雑化に伴い、関係の偶発性の意識が上昇、③関係の偶発性の意識を短絡化させるための〈無害な共同性〉という流れである。

### 3-3-2 1980年代前半に人気となった恋愛ドラマ

#### 3-3-2-1 「ふぞろいの林檎たち」(1983年)

TBS制作、山田太一脚本のドラマである。中井貴一、時任三郎、柳沢慎吾、手塚理美、石原真理子、中島唱子が出演している。社会の中で落ちこぼれとされる四流大学生たちの青春を描いたドラマで、タイトル「ふぞろいの林檎たち」というのは、落ちこぼれを規格外で店頭には並べられないリンゴと例えたものである。通っている大学から感じる劣等感や就職、恋愛などのさまざまな問題が起きる中で苦悩し、葛藤しながら乗り越え成長していく姿をリアルに描いたドラマである。本人たちの年齢に合わせた場面転換を行いつつパートIからパートIVまでシリーズ化もされた。主題歌は、サザンオールスターズ「いとしのエリー」である。

#### 3-3-2-2 「金曜日の妻たちへ」(1983年)

TBS制作、鎌田敏夫脚本のドラマである。古谷一行、小川知子、いしだあゆみ、泉谷しげるが出演している。「少し遠くても一戸建て!」という夢を叶えた家族たちが集まる東京郊外のニュータウンで3組の男女が巻

図 3-1 「ふぞろいの林檎たち」



出所: Amazon.co.jp

図 3-2 「金曜日の妻たちへ」



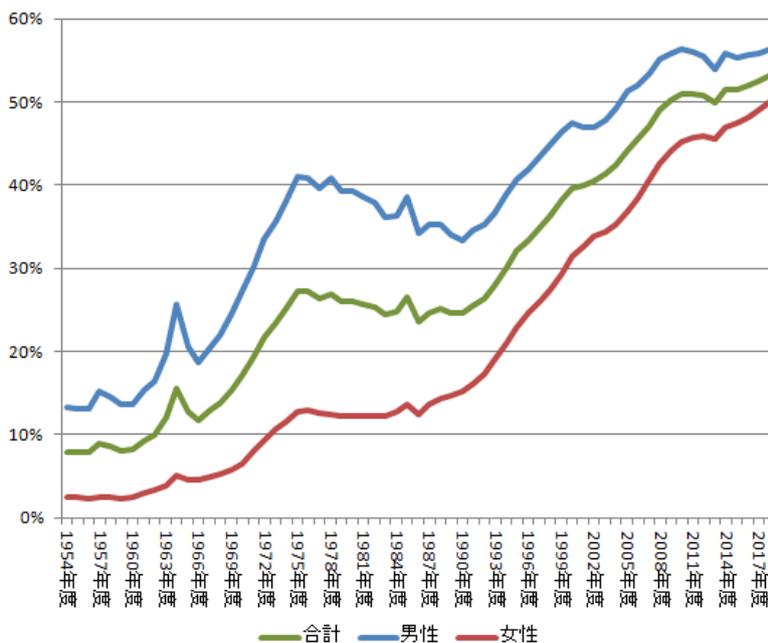
出所: Amazon.co.jp

き起こす、不倫や人妻の浮気といったような恋愛模様・人間模様が描かれている。“金妻（キンツマ）”という流行語を生み出し、不倫という言葉が世に定着させた。また、“金妻シンドローム”といわれる一種の社会現象も巻き起こした作品である。のちに第2作、第3作と配役や内容を変えシリーズ化された。

### 3-3-3 ドラマ人気の背景

「ふぞろいの林檎たち」には日常の中の横の人間関係が描かれている。そしてその人間関係は同じ状況や似たもの同士が集まっていることが物語の前提としておかれている。学歴による同年代の差異化から見えるのは若者という括りの中でジャンル分けがなされていたことであり、その表れともとれる。また、実際にドラマ放送以前の1970年代後半からそれ以降大学進学率が上昇している。

図 3-3 大学（学部）進学率（過年度高卒者などを含む）



出所：ガベージニュース

「ふぞろいの林檎たち」では、四流大学に通っているという理由で、登場する3人の男子学生は、恋人ができないという設定が置かれている。彼らはいわゆる、“女に縁がない”状態なのである。一方で、本作には東京大学卒のキャラクターが恋人を連れた色男として登場し比較の対象となっている。学歴が恋愛において“もてる”“もてない”の要素として取り入れられているということだ。当時の視聴者であった若者は、そんな学歴格差に苦しむ様子と自己の様子を重ね、共感した。こういう恋愛がしたいという“理想”がドラマ人気を呼んだというよりも、この場合は当時の若者が「まるで自分を見ているようだ」というその共感性と「自分にもこんな恋愛ができるのかもしれない」という希望を抱かせることに成功したのが人気の要因であろう。毎日続く日常の中での生活を楽しむ「新人類世代」

の特徴の表れとも考えられる。当時から表れ始める学歴や階層という身分の差を物語の主軸に置くことで、「自分にもありそう」と思わせる要因を作り上げていた。

一方、「金曜日の妻たちへ」人気の背景にはどのようなことが考えられるであろうか。それは当時の恋愛観から読み取ることができる。「金曜日の妻たちへ」から 1980 年代高まった恋愛結婚（恋愛と結婚は別であるべきか）に対する考えが物語の主軸に置かれている。また、そのことが人気の要因であるといわれているのである。恋愛結婚を経て結婚した夫婦間の恋愛（不倫）を描く本作は、恋愛と結婚は別でもかまわないのではないかという当時高まっていた議論を象徴とした作品であり、その考え方が一般に広まっていった現れでもある。「恋愛・結婚・性」の三位一体の崩れが示されている。人々の自由恋愛への移行をこの作品の人気の人気を示しているといえるだろう。

### 3-4 1980 年代後半～1990 年代前半の恋愛ドラマ

この時期は恋愛ドラマブームの絶頂期であり、人々が最もドラマの影響を受けた時期だと考えられる。また、「トレンディドラマブーム」が巻き起こった時期でもある。この時期の恋愛ドラマの特徴として、男女複数人によるグループの中での恋愛模様が描かれていることが挙げられる。

#### 3-4-1 「バブル時代」

この当時、1985 年プラザ合意によって引き起こされた好景気が日本に訪れた。いわゆるバブル景気である。この突如舞い込んできた好景気に、日本が沸いていた。この好景気により、ブランド品などの高級品志向が生まれ、派手なお金の使いぶりが目立つようになる。バブル期の象徴ともいえるだろう。服装、お金の使い方の派手さと同様当時の恋愛でのお金の使いぶりも派手であったようで、「アッシー」「メッシー」「ミツグ君」という言葉の流行からもそのことをうかがうことができる。恋愛に関してはほかにも、1980 年代前半の「金妻ブーム」に見るように「恋愛・性・結婚」という三位一体の形が崩れだしたということがいえる。「性と結婚の分離」が意識され、自由恋愛が意識された。恋愛結婚が多い時代ではあったが、必ずしも恋愛が結婚につながらなくてもよいし、自由奔放に恋愛してもよいという考えが広まっていった時期ということになる。デートや恋人へのプレゼントにお金をかける傾向が強く、恋愛への積極性と恋愛が楽しいもの・必需品であるという意識が強かった。

一方で、バブル景気を実感できていたのは、都会だけであって、地方ではその意識は弱かった。地方ではそこまでの好景気を実感しておらず、東京にみられるような派手な消費・ブランド品志向という傾向は薄かったといわれている。東京の華やかな雰囲気と地方のそういうものを感じない雰囲気という差があった。

バブル期（一般的に 1986 年～1991 年の間を指す）の中心にいたのは先にも触れた「新人類世代」であり、その当時はおよそ 20 代で恋愛及び結婚を意識する年齢であった。日

常の中の間関係、＜無害な共同性＞という特徴はこの時期もみられ、恋愛ドラマにもその傾向がみられる。

### 3-4-2 1980年代後半～1990年代前半に人気となった恋愛ドラマ

#### 3-4-2-1 「男女7人夏物語」(1986年)

TBS制作、鎌田敏夫脚本、恋愛ドラマの傑作と今でも名高いドラマである。「男30歳、女27～28歳…なぜか人生定まらずに、未だに青春の名残を捨てきれずにいる男が3人、女が4人。大都会に生きる結婚適齢期の男女7人が、少々遅い青春を不器用にも懸命に生きていこうとする姿が感動を呼ぶ。」

(TBSチャンネルHPより)タイトルの男女7人のメンバーは明石家さんま、大竹しのぶのほか、池上季実子、奥田瑛二、片岡鶴太郎、賀来千香子、小川みどりが演じている。翌年には続編である、「男女7人秋物語」が放送され、こちらも人気となった。主題歌は石井明美の「CHA-CHA-CHA」である。

図3-4 「男女7人夏物語」



出所：Amazon.co.jp

#### 3-4-2-2 「東京ラブストーリー」(1991年)

フジテレビ制作、坂本裕二脚本、柴門ふみの漫画原作のドラマである。田舎から東京の会社にやってきた織田裕二演じる若者・永尾完治は幼馴染で幼稚園教諭の有森也実演じる関口さとみに恋をしていた。しかし、関口は長尾の高校の同級生である江口洋介演じる三上に心惹かれていた。そんななか、長尾は同じ会社で知り合った鈴木保奈美演じる帰国子女の赤名リカから一途にアプローチを受ける。リカと完治のストレートな恋愛を繊細に描いた作品である。原作では完治目線で描かれているが、ドラマ版ではリカ目線で描かれている。主題歌は小田和正「ラブ・ストーリーは突然に」である。

図3-5 「東京ラブストーリー」



出所：Amazon.co.jp

### 3-4-2-3 「101回目のプロポーズ」(1991年)

フジテレビ制作、野島伸司脚本のドラマである。99回お見合いに失敗してきた武田鉄矢演じる冴えない中年男性・星野達郎が、100回目のお見合いで出会った死んだ婚約者を忘れられない浅野温子演じる矢吹薫と出会う。振られても薫にアタックし続ける達郎の姿が視聴者に感動を与えた。作品中のセリフ「僕は死にましえ〜ん」は1991年のユーキャン新語・流行語大賞の候補に選ばれた。主題歌は、CHAGE&ASUKA「SAY YES」である。2003年には中国と韓国のコラボでリメイク版が制作された。

図 3-6 「101回目のプロポーズ」



出所：Amazon.co.jp

### 3-4-3 ドラマ人気の背景

「男女7人夏物語」「東京ラブストーリー」にはまず、新人類世代の人間関係の特徴である、＜無害な共同性＞が表れており、特に「東京ラブストーリー」ではそれが顕著である。「ふぞろいの林檎たち」を見ていた当時は学生だった「新人類世代」が成長し、社会人となったことでその関係性を保ったまま、働く世代を中心に置いた恋愛が描かれるようになったと考えられる。これは「新人類世代」をターゲットとしていたことの表れともとれる。

女性視点や女性の理想の恋愛の形にされた「トレンドドラマブーム」の背景には女性の社会進出が大きくかかわる。1985年の男女雇用機会均等法の制定と、1980年代後半からの未婚率の上昇からも分かるように、恋愛の形にも変化を与えた女性の社会進出は、恋愛の理想を形にしたドラマにも影響を与えた。働く女性が増え、忙しくなったことで恋愛をする余裕は以前よりなくなってしまったのだろう。その忙しさから実際の恋愛に夢が見られなくなった女性たちの夢や理想を詰め込んだ「トレンドドラマ」が心をつかんだのである。「東京ラブストーリー」がリカの視点で描かれたのもドラマへ女性たちがより共感できるようにしたかったという制作側の意図が反映されていると予想される。

いずれの作品にもいえ、またその中でも「男女7人夏物語」において顕著に表れているのが「イケていない男女」の恋愛を挿入していることである。これは、イケていなくとも、さえなくても恋愛はできるというメッセージと考えられる。作品の舞台の多くは“東京”であり、おしゃれで都会的な雰囲気をまとっていた。そして、「東京ラブストーリー」、「101回目のプロポーズ」では、恋愛におけるライバルが登場する。この作品に共通する2点は東京という理想の土地で苦勞しながらも恋愛を成就させるという目標達成の形の提示であると考えられる。景気が良く、皆が希望に満ちていた時期であり、ドラマの中でも理想の世界を提示していた。人々はその姿に憧れを抱いた。その理想の世界の中ではどんなことがあってもハッピーエンドになるのがほとんどの流れであり、視聴者もそれを望んでいた。こ

のようなドラマの描かれ方は景気の良さ・時代の明るさの象徴であると同時に、恋愛への理想の高さの表れともとれる。「3高」という恋人に求める条件からもそれは表れている。

1980年代後半～1990年代前半の恋愛ドラマは身近な人間関係の中のありそうもない理想を描いていた。そこで描かれる恋愛は甘美なイメージを持たず、恋愛には仲間同士のいざこざやライバルの出現のように人間関係の中の面倒くさい部分までも映し出していた。そこからの恋愛成就という形は、景気が良く困難があっても大抵の目標は達成できるという当時の社会の象徴なのかもしれない。

### 3-5 1990年代後半～2000年代の恋愛ドラマ

この時期の恋愛ドラマの特徴として、恋愛になんらかの壁となる要素が加えられていた。主人公やヒロインの災難が起こったり、また、病気や死が恋愛ドラマの要素となっていたりする。そういったマイナスの要素を含んだ作品が人気となる。また、その傾向が強くなってきているのは、1995年から2000年に入るまでの作品である。なお、2000年以降の作品にもそのような傾向はみられる。

#### 3-5-1 「団塊ジュニア世代」

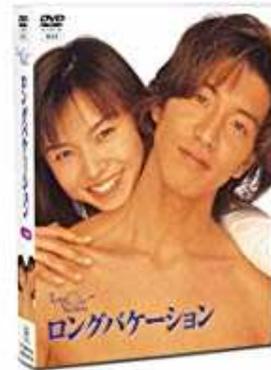
この当時中心にいたのは、「団塊ジュニア世代（就職氷河期世代）」と呼ばれる世代である。「団塊ジュニア世代」は、1971年～1974年生まれの人々のことを指し、第二次ベビーブーム期に誕生したこともあり非常に人口が多い。当時の恋愛ドラマの主な視聴者層であったと予想される。1991年のバブル景気の崩壊から1994年ごろまでは不況に傾いていたものの依然としてバブル的な雰囲気が日本には残っていた。しかし、1995年に阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件といった未曾有の災害・凶悪な事件の発生により、そのような浮ついた雰囲気は消えていく。「団塊ジュニア世代」は「就職氷河期世代」はたまた「貧乏クジ世代」ともいわれるような不運な時代を過ごした世代である。大学受験の際は、その人口の多さから受験戦争が激しく、特に大学進学は困難を極めた。苦勞して大学に進学し、卒業して仕事に就き、やっと安定できると希望を抱いたもののバブル経済の崩壊により急激な不況に見舞われ、就職活動は厳しい状況に追い込まれた。このようなことから「団塊ジュニア世代」の当時の若者は努力しても報われないということを強く感じた。1つ上にバブルを経験した世代がいたこともあり「大人になれば楽しいことが待っている」というイメージができていたが、それが打ち崩されることとなったため希望からの落差が非常に大きい。これらのことによって「団塊ジュニア世代」の人々は、「激しい競争の裏返しで、『個性重視』『自分探し』の世代になった。自意識が強いから、消費者としては『賢い自分』でなければ満足できない」（東洋経済 ONLINE 2014年の記事より）ようになっていった。ここからも読み取れるように、「新人類世代」とは異なり、それぞれの個性という違い、他者との違いが若者の間では重視された世代である。そして、消費をあまりせず、貯蓄をする傾向は社会に対する不安を表す。

### 3-5-2 1990年代後半～2000年代前半に人気となった恋愛ドラマ

#### 3-5-2-1 「ロングバケーション」(1996年)

フジテレビ制作、北川悦吏子脚本のドラマである。結婚式の当日に婚約者に逃げられた山口智子演じる葉山南はその婚約者のルームメイトである木村拓哉演じるピアニストを目指す青年・瀬名秀俊の住むマンションに転がり込むことになる。婚約破棄で落ち込む南に瀬名は人生がうまくいかない時は「神様がくれた休暇」だと考えようと提案し励ますのであった。同居生活を通して互いにかけてがえのない存在になっていく様子を描いている。このドラマは、通称“ロンバケ”と呼ばれた。主題歌は久保田利伸 with Naomi Campbell「LA・LA・LA LOVESONG」である。

図 3-7 「ロングバケーション」



出所：Amazon.co.jp

#### 3-5-2-2 「失樂園」(1997年)

日本テレビ制作、中島丈博脚本、渡辺淳一の大ヒットした小説「失樂園」が原作である。古谷一行演じる出版社の敏腕編集者である久木祥一郎は、ある日突然、編集の第一線から外される。そんな久木の前に、川島なお美演じる松原凜子という美しい人妻が現れる。久木は妻子がありながらも凜子に惹かれ、強引に言い寄っていく。久木の情熱的な恋心を凜子は受け入れて、週末毎に逢瀬を重ねていくことになる。二人の関係は次第にエスカレートしていき、互いの家庭を崩壊させていくこととなっていく。

図 3-8 「失樂園」



出所：Amazon.co.jp

#### 3-5-2-3 「神様、もう少しだけ」(1998年)

フジテレビ制作、浅野妙子脚本のドラマである。金城武演じる石川啓吾は音楽プロデューサーとして成功しているものの恋人の死をきっかけとして、人生に価値を見出せないでいた。一方、深田恭子演じる女子高生の叶野真生はどこにでもいる平凡な女子高生で、代わり映えのしない日常に飽き飽きしていた。真生は啓吾音楽の大ファンで、コンサートに行くことを待ち望んでいた。

しかし、そのコンサートのチケットを紛失してしまい、チケット入手のための資金にしようと援助交際をする。後日コンサートの帰り道、啓吾の乗る車に遭遇し、真生が追いかけて2人は出会う。そのことをきっかけとして恋愛関係へと発展していく。そんななか、援助交際での性交渉により真生はHIVに感染していることが発覚する。主題歌はLUNA SEA「I for You」である。

図 3-9 「神様、もう少しだけ」



出所：Amazon.co.jp

#### 3-5-2-4 「ビューティフルライフ」(2000年)

TBS制作、北川悦吏子脚本のドラマである。木村拓哉演じるカリスマ美容師の青年・沖島柊二と常盤貴子演じる難病に侵され、10年以上車いすで生活する図書館司書の女性・町田杏子との恋愛模様を描いた作品である。恋愛をテーマとしたドラマでは、歴代1位の最高視聴率である41.3%を記録した。このドラマがきっかけとなり「バリアフリー」という言葉が世に広がることとなった。主題歌は、B'z「今夜月の見える丘に」である。

図 3-10 「ビューティフルライフ」



出所：Amazon.co.jp

#### 3-5-3 ドラマ人気の背景

ヒロインの病気や主人公のマイナス局面（婚約者との結婚が破棄される、仕事で急に異動が命じられるなど）からの物語が始まる作品が多い。また、病気と闘いながらの恋愛という作品の描かれ方は不運な時代を生きる若者の象徴または延長なのではないかと筆者は考えている。以上に挙げた作品以外にもその傾向がよく表れていて、2000年代前半までそういった描かれ方の恋愛ドラマが多くみられる。

病気と闘いながらの恋愛を描いたこの時期のドラマはヒロインの死で物語が終わる場合もあった。当時の人気となった作品として挙げた、「神様、もう少しだけ」や「ビューティフルライフ」においてもヒロインの死で物語が終了する。「失樂園」でも久木と凛子は死を

決断する。二人で青酸カリを飲み、互いに自らで命を絶つのだ。これにより二人が永遠に結ばれることを視聴者に強く印象付けた。この「死」という要素はある種の愛の追求や純愛の意識を高める要素になっているということである。この時期のドラマは中心に純愛というテーマが置かれている。このように病気・死といったマイナスイメージは不運からの脱却のイメージと純愛の高まりの二つの意味合いがあるのではないかと考えられる。精神的なつながりを重視する純愛の要素を高めるために病気や死の他の要素を取り入れたドラマが 1990 年代後半に入る以前にもみられていた。「高校教師」(1993 年)である。このドラマでは教師と生徒の恋愛を描いており、その社会的にタブーとされる要素が純愛を高めている。

マイナス面から恋愛を通して脱却していく構図とそのようなマイナス要素が純愛の意識を高めていったことについてみていったが、2000 年以降ではまた、少し変わった傾向がみられる。それは、お金による恋愛のマイナススタートであり、金銭的な格差が恋愛ドラマの要素として取り入れられるようになることだ。「やまとなでしこ」(2000 年)や「花より男子」(2005 年)がその代表である。いずれの作品も金銭面で「恋愛対象外」となる主人公が冒頭で描かれる。しかし、物語が展開するなかで本人の人柄や魅力によって恋愛に発展していくのである。このようなマイナスのスタートや金銭格差により恋愛できるはずのない二人の恋愛を描くことで不況に世より未来に明るさを見ることができなくなった人々に現実では味わえない理想を提示していると読み取ることができる。また、この面においても外見という魅力よりも内面的な魅力を重視する様子を描き、恋愛における精神的なつながりの重要性をメッセージとして伝えていたと考えられる。

この時代に恋愛ドラマを見ていた「団塊ジュニア世代」は、現実の不況とドラマ内で困難に立ち向かう主人公やヒロインを見て重ね、共感していたことがまず考えられる。そして、恋愛の傾向としてこれ以前に見られた自由恋愛より純愛志向の強まりがこの時代の人気ドラマの傾向から予想できる。

### 3-6 「希望格差社会」

先にも触れたように 1990 年代後半から「バブル崩壊」の影響とその後の大きな災害の影響を大いに受け日本は不安定な状況になっている。また、今まで、例外的なものとされてきた様々な問題が 1990 年を超えたあたりから量的に増加し、それはもはや例外的なものとはとらえがたくなってきた。例えばフリーター(未婚若年のアルバイト雇用者)は、2000 年の国勢調査によると、200 万人を突破しており、失業中の若者・未婚の派遣社員を含めると 400 万人を超すまでになった。大学卒の未就職者、高卒の未就職者はいずれも増加しており、小中学校の不登校者も 13 万人まで増加した。今まで例外的とされ、大きな社会問題にならなかったケースが社会的に無視できないほどの量になっている。将来生活に不安を感じる人が増えている。(山田, 2007:20) 昔は、努力すれば報われるのが当たり前だと捉えられていたが、今はそうではなくなってきている。「高度経済成長期から 1990 年頃まで

の社会では、社会基盤が安定しており、予測可能性が高く、生活目標が明らかであり、かつ、ほとんどの人がその目標に到達可能であった。だから、多くの人々は『希望』をもてた」（山田，2007:25）というのがかつての日本であった。いまは経済的に不安定な状況から、経済的格差とそれに伴う職種・ライフスタイルの格差が出現している。そして、そこから生まれるのが「希望の格差」である。人間は希望で生きるものであり、この「希望の格差」は生活するうえで重要となる。しかし、そもそもの経済格差は個人の努力ではどうにもできないものであり、格差がある中で下に落ちてしまうと上に上がることは非常に困難である。こういった個人の力ではどうにもできない状況に「団塊ジュニア」以降の世代は苦しめられているのである。

### 3-7 2000年代後半～現在の恋愛ドラマ

この時期には恋愛をテーマとしたドラマが高視聴率を得た例はあまり見られない。恋愛ドラマは2000年代後半から人気を落としていく。一方で近年人気となり、高視聴率を獲得したドラマは「半沢直樹」のような、仕事や社会をテーマにしたもの、あるいは「家政婦のミタ」のような家族をテーマにしたものが多い。また、“恋愛”がドラマ内に描かれていたとしても中心のテーマではなく、ほかのテーマのドラマの一部程度の扱いになっていたりする。1章にもみたように今の若者は社会の不安定さから、恋愛に対して相手に求める基準が増え、収入によって恋人をあえて作らない（または、作れない）状況が生まれていることが明らかになった。恋愛に対して夢を観なくなり、高い理想を追いかけなくなっている。恋愛の枠からは外れるが、内閣府が2013年に行った13歳から29歳の若年層を対象とした調査では、「あなたは、自分の将来について希望を持っていますか」という問いに、『希望がある』と回答したのは61.6%（内訳「希望がある」12.2%+「どちらかといえば希望がある」49.4%）という結果であった（内閣府 平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査より引用）。同調査は他国でも行っており、アメリカの若年層が、『希望がある』と答えた割合は91.1%、イギリスでは89.9%、韓国では86.4%といったように日本と比較するとその割合は非常に高い。恋愛のみならず、日本の若者が夢や希望を抱けなくなったことが分かる。ドラマは基本的にはフィクションであり、空想上の理想を描いたものがほとんどであるため夢や抱きづらくなってしまった「団塊ジュニア世代」以降の若者にはマッチしなかったのかもしれない。

また、恋愛ドラマ人気の低迷と恋愛ドラマ放送の減少は2000年までの作品で恋愛ドラマを「やりつくしてしまった」とも考えられる。2000年代までに注目した恋愛ドラマの傾向として恋愛と「病気・死」を絡めているものが多かった。「失樂園」（1997年）では恋愛の先の「心中」までも描いている。このようにある種の究極の愛の形を描いてしまったと考えられる。

しかし、恋愛ドラマは全く放送されていないわけではない。この時期放送された恋愛ドラマは「ラスト・シンデレラ」（2013年）や「昼顔～午後3時の恋人たち～」（2014年）

といったように「年上の女性が年下の男性と恋愛する姿や既婚女性の恋愛を描いたもの」が多いことがその傾向として挙げられる。このような傾向は 2 章に見た、若年層の「テレビ離れ」の影響が大きいのではないかと考えられる。現在は 40 代以上の視聴時間が 30 代以下に比べて長い。40 代以上をターゲットとしたドラマの制作に放送局が力を注ぐようになるのは当然の流れである。

### 3-7-1 恋愛リアリティ番組の増加

恋愛ドラマの人气が後退している中、増加の傾向にあるのが恋愛リアリティ番組である。恋愛リアリティショーともいわれる。その名の通り、実際の生活の様子から男女が恋愛に発展していく様子をリアルに映し出した番組である。その先駆けとして、人気を得たのが 1999 年に放送を開始した「あいのり」だ。

#### 3-7-1-1 「あいのり」の登場から現在まで

「あいのり」とは、男性 4 人と女性 3 人の計 7 人が、ラブワゴンと呼ばれる自動車に乗って、様々な国家を旅する中で繰り広げられる恋愛模様を追う番組である。参加者は一般公募により決定する。ルールは参加者が意中の異性に日本行きチケットを渡し、告白する。告白が成功の場合、キスをして 2 人で帰国し、失敗の場合チケットは返され、1 人で帰国することとなる。1999 年から 2009 年まで地上波で放送され、2017 年よりインターネットテレビにて新シリーズがスタートした。地上波での 10 年間という長期の放送と近年の復活からも読み取れるようにあいのりの人気は高い。また、若年層のインターネット利用の増加がみられるなかインターネットテレビでの放送を開始したことは若者をターゲットにした番組であるということが考えられる。「あいのり」のように一般の参加者を集ってそのリアルな恋愛模様を放送する番組が増加傾向にあり、いずれもほとんどが若者に人気のあるインターネットテレビ上での番組である。

「あいのり」終了後に、登場し人気となった恋愛リアリティ番組に「テラスハウス」がある。「テラスハウス」は複数の男女がシェアハウスする様子を記録した番組であり、シェアハウス内での恋愛模様や心の動きを中心に映している。2012 年に放送を開始し、2014 年に地上波での放送は終了したものの、2015 年より Netflix にて配信を開始した。「あいのり」「テラスハウス」以降、「バチェラー・ジャパン」(Amazon プライムビデオ、2017 年～)「オオカミくんにはだまされない」(AbemaTV、2017 年～)、インターネット番組で多くの恋愛リアリティ番組が配信されていくこととなる。

図 3-11 「あいのり」



出所：FOD HP

以上のように近年の恋愛ドラマの人気低迷に反した恋愛リアリティ番組の増加は、理想よりも現実を見るようになった若者の志向の表れであると考えられる。恋愛ドラマと恋愛リアリティ番組は恋愛という枠は同じだが大きく異なることがある。それは、恋愛の成功と失敗が番組内に組み込まれていることである。台本があるわけでもないため流れが読めない。そして、出演者のほとんどが一般からの参加者であるため本人たち言葉は非常に現実的であり、恋愛における緊張感も現実味がある。

### 3-8 小括

改めて、人気となったドラマの特徴を年代ごとに見ていくと、以下のようになる。なお、恋愛ドラマの傾向からみる恋愛への理想の高さ、低さを筆者の見解でまとめている。

表 3-2 年代別人気恋愛ドラマの傾向

年代	人気恋愛ドラマの特徴・傾向	理想度
1980 年代前半	人物像が身近で共感できる 当時の恋愛観を反映	中～高
1980 年代後半 ～1990 年代前半	都会的・美男美女が出演 ありそうもない理想を描く	高
1990 年代後半 ～2000 年代前半	病気や死（マイナス要素）と恋愛の組み合わせ ハッピーエンドではない恋愛ドラマ	中～低
2000 年代後半 ～現在	恋愛ドラマの人気が低迷 →恋愛リアリティ番組への移行	低

筆者作成

恋愛ドラマはほとんどがフィクションであり、架空の物語である。現実とはかけ離れた理想を描くこともできる。恋愛以外でもこれは同様のことであると考えられるが、夢を抱けるか否かは社会の安定性が大きく左右する。高度経済成長期を経て、経済的に安定した 1980 年代前半やバブル景気という好景気に見舞われていた 1980 年代後半から 1990 年代前半恋愛ドラマにおいては、高い理想が描かれている。特にバブル期のドラマはその傾向が強い。一方、バブル崩壊後の 1990 年代後半以降は高い理想は描かれなくなり、恋愛ドラマがヒロインの死で終わるものも登場した。これは理想が叶わないという意識の表れとも予想できる。そして、依然として不安定な社会といわれる現在では恋愛ドラマの人気は以前から比べると非常に低くなった。理想を描く恋愛ドラマの存在自体が薄れつつあるのである。このように社会変動・経済と恋愛ドラマ内の理想度及び恋愛ドラマの人気には相関があることが読み取れる。現在、かつての恋愛ドラマ人気を恋愛リアリティ番組増加と人気に移行しているように、恋愛ドラマ・恋愛番組の主な視聴者層と予想される若者は恋愛において理想や夢の世界でなく、現実的なものを見ていこうとしている姿勢が恋愛ドラマへの志向に表れているといえるだろう。

恋愛の傾向については 1980 年代～1990 年代前半までは性と結婚の分離（自由恋愛の傾

向) がみられ、1990 年代後半～2000 年代ではそれに反して、純愛の要素が強い。

## 第4章 まとめ

本論文では、恋愛に関するデータから、昔と今とで恋愛への見方や価値観がどのように変化していったのかということを中心にその象徴となる年代ごとのテレビ視聴の変化を踏まえたうえで、テレビドラマから年代ごとの恋愛傾向と恋愛に関する意識などについてみていき、現在の若者の恋愛観に迫ろうとした。

第1章にて今と昔の恋愛の在り方を比較していったが、異性との交際関係の有無から分かるように今の若者のいわゆる「恋愛離れ」は事実であることがまず、わかった。また、その要因を過去と比較することでつかむことができた。まず、見合い結婚から恋愛結婚への移行である。結婚の要因が“恋愛”になったことで恋愛と結婚とのつながりが深くなり、恋愛することを単純なものと考えられなくなってしまった。相手の収入や職業を先に見極めなければならなくなったのである。恋愛が手軽なものではなくなってしまったのだ。バブル期では恋愛結婚が主流でありながらも、必ずしも恋愛と結婚は結び付かなくてもよいという考えから結婚に縛られない自由な恋愛が高まっていた。「金曜日の妻たちへ」の人氣がそれを物語っている。そもそも恋愛をすることへのハードルが今と昔では違うのかもしれない。

次に社会の安定性の影響である。経済的な安定性・収入と恋愛とのつながりが大きい。男性・女性ともに交際相手や結婚相手に求める条件は経済的な部分にまつわるものがみられるようになってきている。「3高」から「3低」、「4K」から「5K」というような変化が特にそのことを表しており、交際相手・結婚相手に求める条件の複雑化・不可視化は恋愛に至るまでの道りを険しくした。景気によって恋愛に描く理想も異なってくる。バブル期は恋愛ドラマからも見えるよう恋愛に抱く理想はとても高い。トレンドドラマのブームからもそのことは表れている。また、バブル期のドラマには誰にでも恋愛はできるというメッセージが込められていた。一方、今は、恋愛は誰にでもできるものという印象が弱い。収入による恋人の有無のデータがあるように実感している若者少なくはないだろう。収入や格差によって高い理想が描けないのが現状である。そもそも恋愛ドラマを見なくなり、恋愛リアリティ番組の視聴へと移り変わっている今の若者は現実を見ようとしている傾向の表れである。以上のことが「若者の恋愛離れ」の要因であり、今の恋愛の状況である。

恋愛の傾向としては恋愛ドラマから見ていったように1980年代～1990年代前半の特にバブル期において、自由恋愛志向が強かった。1990年代後半から純愛志向に変化していった。不特定多数と恋愛するというよりも誰か一人と精神的なつながりを重視した恋愛をするように今後も変化していく可能性がある。というのも相手に求める条件が複雑化したため、恋愛関係へと発展できる可能性は低くなっており、結ばれる相手も限られてくるわけである。そのようなことから、ひとりの相手を大切に想う純愛志向が強まる可能性があるのではないかと考える。

以上のことから言えるのは、今後、社会全体が変化しない限り、「恋愛離れ」の状況を打

破することはできないということである。社会が変化しなければ、個人も変化はしない。  
恋愛においてもこのことは大いに当てはまるのである。

## おわりに

本論文を通して、まず恋愛の今と昔を知ることができた。そして、世代ごとの恋愛に対する見方とともに当時の人間関係や社会背景というところまで見ていくこともできた。恋愛は個人であるものでありながらも、社会変化の影響を大いに受けている。昨今の恋愛離れも社会の不安定化に伴うものであり、その影響を受けた結果である。本論文を作成するまで恋愛や結婚にまつわるデータを細かに見たことはなかったが、顕著な交際関係をもたない若者の増加と未婚率の上昇はもっと問題視すべきことかもしれないと感じられた。また、恋愛に影響を与えているものに社会の安定性、景気を挙げながら、展開していったが、人間関係という部分に着目するとほかの要因も見えてきたかもしれない。もっと視野を広げて物事をとらえていけたらと思う。

テレビという媒体はその社会を強く反映しているとともに、影響力は依然として強いのだと改めて感じられた。本論文において注目したバブル期の恋愛ドラマの描かれ方はその最たるものだと考える。私は春からメディア関連の職に就く。今の社会を映し出したもの、社会に影響を与えられるものを世の中に発信していけたらと考えている。そのためにも年代ごとの若者世代に違いがあったように社会の変容に気づく力をつけていかねばならないと恋愛ドラマを考察していく中で感じた。

「恋愛離れ」というものに注目した本論文であるが、論文の作成を通して自身の視野を広げるきっかけとなった。これからも社会の物事を自分なりの視点で事実をもとに考えていけたらと思う。

## 謝辞

本論文を製作するにあたり、ご協力してくださった皆様に心より感謝申し上げます。本論文においては、私個人の理解や解釈が含まれている部分が多々あるため、一個人の意見であるのご理解いただくと幸いです。

本論文作成にあたり、大変お忙しい中ご指導をいただきました 角一典先生には厚く御礼申し上げます。先生のご指導のおかげで本論文を完成させることができました。本当にありがとうございました。

## 参考文献

- ・阿部真大・北村文, 2007, 『合コンの社会学』光文社.
- ・牛窪恵, 2015, 『恋愛しない若者たち コンビニ化する性とコスパ化する結婚』ディスカバー携書
- ・加藤秀一, 2004, 『〈恋愛結婚〉はなにをもたらしたか—性道徳と優生思想の百年間』筑

摩書房.

- ・小谷野敦, 2005, 『恋愛の昭和史』文藝春秋.
- ・小谷野敦, 2012, 『日本恋愛思想史』中央公論新社.
- ・長谷正人, 2016, 『映像文化の社会学』有斐閣.
- ・宮台真司・石原英樹・大塚明子, 1993, 『サブカルチャー神話解体』PARCO 出版.
- ・山田昌弘, 2007, 『希望格差社会「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.

## 参照 HP

- ・ AbemaTV HP

<https://abema.tv/>

- ・ Amazon.co.jp

[https://www.amazon.co.jp/ref=nav\\_logo](https://www.amazon.co.jp/ref=nav_logo)

- ・ NHK 放送文化研究所

<http://cgi2.nhk.or.jp/bunken/index.html>

- ・ FOD HP

<http://fod.fujitv.co.jp/s/>

- ・ ガベージニュース

<http://www.garbage-news.net/>

- ・ 「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン 新語・流行語大賞

<https://www.jiyu.co.jp/singo/>

- ・ 厚生労働省 HP

<https://www.mhlw.go.jp/index.html>

- ・ 国土交通省 HP

[www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h24/hakusho/h25/html/n1213000.html](http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h24/hakusho/h25/html/n1213000.html)

- ・ 国立社会保障・人口問題研究所 HP

<http://www.ipss.go.jp/>

- ・ サイバーエージェント HP

<https://www.cyberagent.co.jp/>

- ・ スカパーJSAT ワールド

[https://www.sptvjsat.com/sp\\_world/worldtop/index.html](https://www.sptvjsat.com/sp_world/worldtop/index.html)

- ・ 性別役割分業意識の変化 ―若年女性にみられる保守化のきざし―

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/watching/wt0509a.pdf>

- ・ 帝国書院 HP

<https://www.teikokushoin.co.jp/>

- ・ TBS HP

<https://www.tbs.co.jp/>

- ・ デジタル大辞泉

<https://daijisen.jp/digital/>

- ・ テレビドラマデータベース

<http://www.tvdrama-db.com/>

- ・ 内閣府 HP

<https://www.cao.go.jp/>

- ・ 年代流行

<https://nendai-ryuukou.com/>

- ・ Panasonic HP

<https://panasonic.jp/>

- ・ ビデオリサーチ HP

<https://www.videor.co.jp/>

- ・ フリュー株式会社 <平成 JK の世代別トレンド比較！～ライフスタイル編～>

<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000001224.000005167.html>

- ・ マイナビウーマン HP

<https://woman.mynavi.jp/>

- ・ マクロミル HP

<https://www.macromill.com/>